都留文科大学 地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門 機関誌
［フィールド・ノート］ no. 73 / 2012 / Jun.

FIELD NOTE

no. 73 Jun.

10 周年企画

第 1 回
『ウォールデン 森の生活』を読み返す

特 集

土

街なか土蔵見聞録

コケ探検
足元に広がる新しい世界

つくるをみつめる④
土の七変化

小さな畑から

都留市の旧 5 町村を巡る (1)
梅がつなぐ過去·未来

宮原の畑を耕す

FIELD·NOTE 10 ANNIVERSARY

FIELD NOTE

no. 73 Jun.

『フィールド・ノート』では「都留の自然と人との交流」をテーマに、地域の自然・人・文化に関する情報を記録し、発信しています。裏表紙のロゴの絵はアメリカのナチュラリスト、ヘンリー・D・ソローの著書『ウォールデン　森の生活』の初版本扉に、ソローの妹ソフィアが描いたものです。ロゴにそえられている「Grow Wild」はソローの言葉で、その思想をわたしたちも大切にしたいとの想いを込めました。バックナンバーは都留文科大学コミュニケーションホール地下１階の地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

CONTENTS

特集 土 04

06 街なか土蔵見聞録

10 コケ探検（たん）　足元に広がる新しい世界

12 「つくる」をみつめる–第４篇–
土の七変化

16 小さな畑から

20 都留市の旧５町村を巡る（１）旧東桂村
梅がつなぐ過去・未来

22 宮原の畑を耕す

24 土にふれた、そのさきに

26 くらしを彩るつどい
～老人クラブの活動から～

28 儀秀稲荷例大祭の１日

30 ひろいもの　4. 鹿の角

32 起き上がる朝
――リフォームの根源――

34 10周年企画　第１回
『ウォールデン 森の生活』を読み返す

36 Field Note News

38 ハーブの庭

40 山梨の味 ～甘々娘編～

42 フィールド・ミュージアムのたのしみ⑰
谷の町・史の里 都留市高尾町通り 山本書店 ②
フィールド暦／センサーカメラが写した動物たち

46 編集後記

特集

土

『フィールド・ノート』は、２０１２年に10周年を迎えました。
私たちが暮らす「都留」とは、どのような土地なのでしょうか。
あらためて、私たちの足もとに目を向けてみたくなりました。
そこで、手がかりとなったのが、「土」という一文字です。

焼きものや家屋をつくり出す素材。
作物を育み、命をつないできた大地。
人の暮らしや営みが根づいてきた郷土。
多様な生きものが住み処とする自然。

「土」を頼りにさまざまな世界を想像し、「都留」を読み解いてみました。

土から広がる世界を
のぞいてみませんか。

街なか土蔵見聞録

本学フィールド・ミュージアムが所蔵する『奥隆行写真コレクション』のなかに、気になる一枚の写真を見つけました。それは大正 12（1923）年に発生した関東大震災直後の街のようすを写したもの（本頁右下）。撮影されたこの蔵が今でも残っているという話を聞き、4 月 25 日、その蔵を見に行くことにしました。

藤森美紀（社会学科 4 年）
牛丸景太（国文学科 3 年）＝文・写真

都留市文化会館近くの現地に赴き、写真と目の前の風景とを見比べてみます。通りに面した蔵のかたちや遠くに見える山の稜線は、見紛うことなく同じものだとわかります。きっと、幾度となく修繕の手が加えられてきたのでしょう。規則正しい方形模様が続く海鼠壁（なまこかべ）は、「古さ」といったものをまったく感じさせません。しかし、長い年月を経るなかで大きな災害を乗り越えてきたことは確かです。できれば、持ち主のかたにお話を聞いてみたい。眼前の建物に限らず、広く土蔵というものへの興味を抱いていた私たちはお宅を訪ねることにしました。

呼び鈴に応えて出迎えてくださったのは横山矩子（よこやまのりこ）さん（94）。張りのあるしっかりとした声や話しかたに、あとから年齢をうかがった私たちは大いに驚きました。

見聞する

横山家には、敷地内に三棟の土蔵が建てられています。母屋に一番近い手前の蔵が「前蔵（まえぐら）」、その隣が「中蔵（なかぐら）」、そして私たちが

裏通りから見た現在のようす。89 年前とほぼ同じ場所に電信柱が立てられている（2012. 4. 25）

「剥げ落ちた土蔵の壁」大正 12 年撮影。『奥隆行写真コレクション』より

土蔵メモ

上：右から前蔵、中蔵、大蔵。子どもの頃いたずらをすると、蔵に閉じ込められることがあったそう。横山さんはそういった経験はないが、親戚の子が一度入れられたことがあるという

右下：前蔵の戸前で、重い扉を開閉してみる。扉に施された階段状の加工部分が、左右ぴたりと合わさるようになっていた

左下：改修工事をする前の鬼瓦。家のマークである 𠆢 の文字が入っており、母屋には今でも同じ瓦が葺かれている

裏通りから眺めていた蔵は、「大蔵（おおくら）」と呼び分けられていました。「前蔵」と「中蔵」の隙間には屋根をかけて小さな小屋を造り、かつては味噌や漬物などの保存場所として用いていました。

母屋は横山さんが生まれる少し前、大正初年頃に建てられたもので、家が完成するまでのあいだは土蔵で生活したことがあったと伝え聞いているそうです。ゆえに土蔵が建てられたのは母屋よりも前、おそらく百年前後の歴史があると考えられます。むかしは冠婚葬祭をすべて自宅でおこなったため、そのたびに屏風などの調度品、御膳やお椀などが土蔵から出し入れされました。けれど、現在ではそうした品々が必要とされる機会はほとんどなくなったといいます。

「大蔵」は、おもに米などを保管しておく穀蔵としての役目を担っていました。所有している土地を小作農家に貸し、そのお礼として受け取った収穫物を保管しておいたのです。

関東大震災があった大正12年9月1日、当時横山さんは6歳でした。物心がつき始めた頃で震災に関する記憶はほとんど薄れてしまったとのことですが、「ちょうどお祭り（八朔祭り）の日でね、お赤飯を炊いて食べようなんてときだった記憶がありますね」と語ってくださいました。家屋自体への被害もほとんどなく、横山家としてはそれほど大変な思いはしなかったそうです。

蔵のなかに潜入

5月10日、この日は「前蔵」と「中蔵」のなかに入らせてもらいました。入口の両側にある厚い漆喰塗りの扉はつねに開かれたままですが、今でも開閉することができます。しかし、一筋縄ではいきません。じっさいに動かすには、勢いをつけ、なおかつ全体重をかける必要がありました。けっして扉を支える金具が錆びているわけではないのです。自分の体を使って動かすなかで、扉そのものにかなりの重量があるのだと気付きました。

二枚ある木戸をあけ、なかに足を踏み入れると、外から差し込むわずかな光を頼り

土蔵メモ

右上：書画が貼られた襖。なかには冠婚葬祭などの行事で使われた座布団が入っている

右下：前蔵の箱階段。1段1段が高く、急であることがわかる

左：フラッシュをたいて撮影した中蔵二階のようす。荷物の置き場所が整理されていて、意外とすっきりしていた

に土蔵のなかをおおまかに観察できました。まず目に飛び込んでくるのは、美しく仕立てられた襖。色とりどりの書画が一面に並ぶ光景を前に、博物館や美術館に行くまでもなく「ほんもの」に触れる楽しさを嬉々として感じ、胸の高鳴りを覚えました。白日のもとにさらされない秘密の空間に踏み込むような感覚が、好奇心をいっそう掻きたてたのです。

蔵のなかには電気が引かれていないので、奥のほうは真っ暗です。横山さんに教えられ、入口右手にある階段を恐るおそる登ってみますが、やはり何も見えません。もしこの真っ暗闇のなかにひとり閉じ込められたら、何も見えない恐怖と孤独から取り乱してしまいそうです。

フラッシュをたいて写真を撮影してみると、二階には時代を感じさせる調度品や道具などが置かれ、梁からは細長い棚が吊り下げられていることが見て取れました。また内側の壁には、外側同様に漆喰が塗られていることも写真によってわかります。外部だけでなく、内部にいたるまでていねいに仕上げられていることが明らかになりました。

「いまはだめですね。お蔵の役目を果たしてないですよ」。横山さんが重ねてそうおっしゃいます。生活様式の変化にともなって、土蔵は役目を終え、むかしほど重用されていないのかもしれません。取り壊そうかという話が持ち上がったこともあったそうです。けれどそれとは逆に、瓦を葺(ふ)き直したり、壁の塗装を新しくしたりしながら何度も修繕の手を加えてきました。

「先祖が残してくれたからね。残してかなきゃと思って」

持ち主のこうした思いに支えられながら、土蔵はいまなお美しい姿を街なかに留めています。一枚の写真との出会いを端緒に訪れた土蔵は、その場所に存在するだけで時代を反映する、一つの記録です。大きな災害を経てきた歴史や人の暮らしの変遷を、口数少なげながらもしっかりと語ってくれました。私たちは横山さんを通じ、その声なき声に耳を傾けたのだと思います。

左官屋さんに聞く

5月12日、中央三丁目にある円通院で左官屋の作業をしていた平井淳（ひらいじゅん）さん（43）に土壁についてのお話を聞きました。頭にタオルを巻いて作業する姿はいかにも働く男といった出で立ちですが、私に向けられた笑顔はとても穏やかで優しそうな印象を受けました。

土壁とは

さっそく土壁について聞いてみます。土壁は土と水と藁でできているそうです。藁を入れることでひび割れをしにくくします。土壁というと、ぼろぼろと崩れてしまうような想像をしていました。じっさい、土が収縮することによってクラック（亀裂）が入るのですが、その強度に問題はありません。今でも土壁の建物が残っているように簡単に崩れてしまうことはないのです。昔の人の発想力と実用性のある知恵は、現代に生きる私たちを驚かせるものばかりです。

夏は涼しくて冬は暖かい。これもまた土壁の特徴です。さらに調湿もしてくれるので、土壁でできた建物は私たち人にとってとても快適な空間をつくりだしてくれるのでしょう。何よりも、天然のものしか使っていない土壁は人の身体に良いのです。これらの特徴は土そのものの特徴といえるかもしれません。

土壁の今

どうして土壁でできた建物が、このあたりで建てられることがなくなってしまったのでしょうか。それにはいくつか理由があるようです。その要因のひとつに工期短縮が挙げられます。土壁をつくる工程は、竹で木舞（こまい）と呼ばれる骨組みをつくり、そこに土を塗って一週間から二週間おいて乾かします。それを3回ほど繰り返して最後に漆喰を塗るのです。ですから一枚の壁をつくるのに一ヶ月も二ヶ月も時間がかかってしまうそうです。その手間のぶんだけ単価が高くなり、需要もなくなりました。そうして、土壁を土からつくることのできる左官屋さんは70歳を過ぎた高齢の方か京都の左官屋さん以外、もうほとんどいないということでした。そもそも土壁づくりでもっとも重要な、原料である土を採るのが難しいそうです。「その土地の土でないと合わないから」と平井さんは言います。この言葉がとても印象的でした。環境にあった土でないと風化してしまうのです。土壁はその土地の風土と深く結びついていたのですね。私たちに見える土が減り、コンクリートで黒くなっていく地面は、人が自然やそれまでの自分たちの暮らしを上書きしていく様を表しているような気がします。

仕事中の平井さん。現在手がけている円通院のスロープにセメントを塗っているところ

変わりゆく時代のなかでその土地の土が建物として今もそこに在ること。その存在は静かに人と土が関わってきたカタチを教えてくれているのだと感じました。

ハイゴケ（4月15日）
田原 楽山公園
羽状に伸びた葉の
形が特徴。

コツボゴケ（5月12日）
田原 本学自然科学棟
日陰で、地面を覆うよ
うに生えている。

コケ探検（たん）

足元に広がる新しい世界

見慣れすぎてしまって、気を留めることもなかった植物をもう一度注意深く見てみる。すると、不思議な世界が私を待っていた。

大澤かおり（社会学科4年）＝文・写真
砂田真宏（初等教育学科4年）＝写真

コケは、水辺やコンクリートの隙間、街路樹の幹など、どこにでもある。その見た目の違いや名前を、どれだけ知っているだろうか。花や実をつける植物ならば、名前を調べたり写真を撮ったりと興味が湧いてくる。けれどコケを見ても「ああ、コケが生えているな」と思うばかりで、それ以上気に留めることもなかった。それでも、私の周囲にあるコケがすべて同じであるはずはない。一度、見比べてみるのも面白そうだと思った。

先述したように、コケを探すこと自体は難しいことではない。数種類のコケが近くにまとまって生えていることもある。それぞれが身を寄せ合いながら共存しているようで、なんだかいじらしい。地面に膝をついて、顔を近づけて、手にとって、確かめて

ミズシダゴケ（5月16日）
十日市場 永寿院
葉が毛の束のようにふさ
ふさとしている。

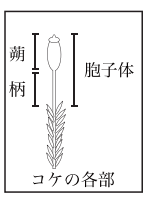
ユミダイゴケ（5月5日）
十日市場 永寿院
蒴がひとところにかた
まって伸びている。

フタバネゼニゴケ（6月5日）
十日市場 永寿院
用水路の壁面に、潜むように
生えていた。

カマサワゴケ（5 月 5 日）
十日市場
民家の近くの用水路でよく見られる。

タチバヒダゴケ（5 月 12 日）
田原 本学入口
本学前の並木になっているケヤキの樹皮に生えていた。

みる。丸い葉であったりふさふさとした毛のような葉であったり、ちょっと眺めてみるだけですぐ識別できるものもある。葉だけでなく、ひょろりと長い柄を持つ蒴（さく）が天に向かって伸びている姿も印象的だ。こうやって近づいてみるまでは、一つひとつの違いに気づくことはおろか、違いがあるということさえ思いもよらなかった。



見た目の違いがわかってくると、今度は名前を知りたくなる。携えていた図鑑と実物とを見比べてみる。うーん、わからない……。葉の特徴から2、3種類まで絞り込むことはできるけれど、それから先はどこで見わければいいのだろう。本学の上野（うえのたけし）健先生がコケに詳しいという話を聞いて、採取したコケを調べていただいた。特徴のある数種類は、見てもらうだけで名前が判明した。けれど場合によっては、顕微鏡で数日かけて調べてみて、それでもわからないこともあるという。

コケを調べ始めてから、コケを見つけると近づいていって眺める習慣がついた。以前に見たコケと一緒だとわかると嬉しいし、初めて見るコケならばわくわくしてくる。地味だと思っていた植物に、こんなに惹きつけられるなんて。ふだん踏みしめている地面と同じ高さに視線を置き、初めてわかったことだ。この地に息づく小さな生きものの存在を、これからも見逃さないでいたい。

ジャゴケ（5 月 16 日）
夏狩 長慶寺
葉の表面がヘビのうろこのようになっている。

ナガバチヂレゴケ（4 月 15 日）
田原 楽山公園
ぽっと花が咲いているかのような形が愛らしいコケだ。

工房にある作業場。緑色の台がろくろ（2012.05.13）

遠木さんがつかっている窯。全体の高さは１mほど（2012.05.13）

焼く前の作品。奥の作品は赤土をつかっている（2012.04.14）

遠木さんが展示会に出展された作品。球型のものはランプの傘になる（写真提供：遠木さん）

「つくる」をみつめる —第４篇—

土の七変化

土を材料にものをつくる。それを考えたときに真っ先に陶芸が思い浮かんだ。土を焼くことで地面にあるようなさらさらした土の性質とは違う、堅くて艶がある陶器ができあがる。じっさいにどうやって土を活かしてつくっているのだろうか。陶芸をしてしていらっしゃる遠木智男（とおきともお）さん（45）にお話をうかがった。

前澤志依（国文学科３年）＝文・写真

4月14日の午前9時ごろ、富士急行線赤坂駅を出て、歩くこと5分。道路沿いにある遠木さんのご自宅に到着。遠木さんは、ご自宅の裏にある倉庫を利用した工房で陶芸をしている。「観光とかでちょくちょく陶芸を体験してたから、もとから興味があったんだろうね」とおっしゃる遠木さん。十数年前に陶芸を本格的に学んでから、現在も趣味で続けていて、展覧会などにも多く出展している。仕事が休みの日に作業をすることがほとんどだそう。陶芸用の土は専用の土を購入するとのこと。使用する土それぞれには名前と性質があるのだという。たとえば、「白信紫の荒」は土のなかに砂が入っていて、焼くとところどころに砂の塊が浮き出てくる。「赤土」は焼くと赤茶色になる。つくりたい作品に合わせて土を変えていくが、種類によっては焼くと割れやすいものもあり、扱うには注意が必要だ。

初めのうちは小さいものを多くつくって、慣れていくのが一般的だが、遠木さんは「最初から大きいものばっかつくってたね。大きいほうがつくるのが難しいから、慣れとこうと思って。大きいものをつくれる（体力がある）若いうちにつくっとけって先生にもいわれてた」とおっしゃる。たしかに、遠木さんのご自宅やアトリエには40㎝ほどの大きい作品が多く置かれている。また、工房には現在乾かしている2つの陶芸作品が置かれていて、こちらは私の上半身ほどの大きさがあった。どのくらいの期間でこんなに大きなものをつくっているのかをうかがうと「形づくりはだいたい3日くらいかな」とのこと。今回つくったものは、形をつくるのに3日かけ、乾かすために1ヶ月以上おき、焼きあげるのに2週間かける。遠木さんは、ほかの大きな作品でも最低2ヶ月を製作期間として費やす。すぐに完成するものだと思っていたので、時間がかかることに驚いた。

陶芸のメインイベント

作品の形ができて、乾いたらいよいよ窯に入れて焼く準備にかかる。「焼きものっていうくらいだからね、陶芸は焼くことがメインイベントだよ」とおっしゃる遠木さんはどこか楽しそうだ。焼くときに注意するのはしっかりと乾いているかどうか。完全に乾いていないと焼いているあいだにひびが入ったり、欠けたりすることがあるそう。だからこそ、作品を大事に扱いながらじっくり時間をかけることが大切になってくる。

最初に焼くときは「素焼き」といって、一度、８００度まで窯の温度を上げて焼く。そうすることで、丈夫になって扱いやすくなるとのこと。そして素焼きをしたあとに釉薬をつける。この釉薬も大事なポイントだ。釉薬は「長石」と「珪石」という鉱物を混ぜたものを合わせてつくられていて、これが溶けることによってガラス製品のように表面に艶が出る。そこに銅や鉄、灰などを入れると色がつく。どの成分をどのくらい入れるか、釉薬がどのように溶けるかによって色のぐあいも変わってくる。「化学の原理だよね」と遠木さん。化学物質を何％調合することで、どのような発色になるといった化学変化の話にな

陶芸をされている遠木さん。ふだんは電気関係の仕事をしている（2012.05.13）

上：ゼーゲルの原型。下から９・８・７と番号がふられている　(2012.04.14)

下：ゼーゲルが溶けたあと。左から９・８・７番のもので曲がっている角度から溶けぐあいをみる　(2012.05.13)

ってくるから、考え出すとなかなか難しい。私が混乱していたようすをみて、遠木さんは「ま、やってみないとわからないから」と苦笑いしながらつけたす。化学変化を考えても、じっさいに色の出かたは実験しないとわからないので、ある程度考えて調合したら、あとは焼きあがってからのお楽しみだという。

釉薬をつけたあとはいよいよ「本焼き」にはいる。だいたい１時間に１００度ずつ上げていき、８００度まで上げたら少しペースを緩める。それから、窯のうしろにある空気孔（ドラフト）をつかって窯のなかの空気の量を調整する。そうすることで煙突から空気が排出される調子が変わってくる。空気孔を開けて煙突からの排出が悪くなると還元し、閉じて排出をよくすると酸化する。このことを「窯の雰囲気をつくる」というらしい。還元と酸化によって釉薬に酸素が付着する量が変わり、色も変化する。たとえば銅を含んだ釉薬をつけて還元させると赤くなり、酸化させると緑になる。

遠木さんが作品を焼くときは、１２５０度まで窯の温度を上げる。窯のなかの温度を知るために登場するのが、温度計のほかにもう一つ、釉薬とおなじ物質でつくられたゼーゲルというもの。それには数字がふられていて、数字が小さいほうが低い温度で溶ける。「だいたい８番をつかうかな」というのは遠木さんのこだわり。８番は１２５０度のあたりで溶ける。遠木さんにとってはちょうどいい温度らしい。

「あんまり温度をあげすぎると、釉薬が溶けすぎてテカテカになって安っぽいからおれは好きじゃないんだよね」

腕を組んで、置かれている作品を一つひとつ見ながらおっしゃる遠木さん。窯の温度がもっとも重要になってくるのだろう。焼きあがるのにはだいたい16〜22時間かかる。窯をつかい始めたころは頻繁に温度計を見て温度の上がりぐあいを調べていたそうだが、最近は感覚でみているそう。窯の雰囲気をつくるために何時ごろに８００度になるかを逆算して、焚き始めの時間を決めているらしい。焼くために丸一日費やして、ようやく一つの陶芸作品が完成する。

灰を混ぜた釉薬の溶けぐあいを実験したもの。温度や釉薬の厚さなどで溶けかたも変化する　(2012.05.13)

だが、窯に入れるときに欠けたり、焼いているあいだにひびがはいったりして失敗することは日常茶飯事だとか。

「焼く前に気に入った形がつくれても、焼いている最中に割れたり、色のつきかたが気に入らなかったりすることがあるんだよね。逆に、失敗かなあと思ったのが……よくできてたりするんだよ」

せっかく気に入った形ができたのに、失敗したらショックが大きいのではないかと思ったが、遠木さんからは失敗しても、次こそは成功させるという熱意が伝わってきた。釉薬の調合で色味がどうなるかは焼いてみないとわからないように、完成しないとわからないし、完成してから新しい発見があるかもしれない。遠木さんは、つくればつくるほど今度はこれに挑戦してみようと思うのだとか。「成功させようと思ってもなかなか成功しないからね。だからそういうのが陶芸のおもしろさなんだと思うよ」。遠木さんの挑戦はこれからも続いていく。

陶芸に挑戦

遠木さんに教えていただきながら陶芸に初挑戦した。今回は、焼き上がると白くなる「白信紫」という種類の土をつかう。

1

ろくろを回しながらキリで土台となる円を描く。キリを固定させて浅く切り込みを入れるのがコツ

2

土台にきずを入れて土を水で溶かした「どべ」を塗る。これらは接着剤の役割を担う

3

紐状にした土を土台に一段ずつ巻き、くっつける。形に気をつけながら好きな高さになるまで繰り返していく

4

半乾きになったら、でこぼこなところを鉋で削っていく。あえてでこぼこを残すときもある

5

土台に外側と内側の円を描き、底をつくる。削りすぎると穴が空いてしまこともあるそう

6

しっかり乾いてから釉薬をつける。今回は色がつかない透明油をつける。釉薬が乾いたら窯で焼いて完成

完成までの道のり

削る前

→

焼く前

→

完成！

土からできる作品たち

5月13日の午後、再び遠木さんの工房へお邪魔して、陶芸に初挑戦した。つくる前からどんなふうにできるのか、どういう形にしようかという期待と楽しみでいっぱいだった。いざ土の塊を前にしたとき、私はきれいな筒型の湯飲みを思い浮かべた。でもじっさいにつくってみると、側面がでこぼこで逆三角形の湯飲みができあがった。これはこれで味があっていいのだが、イメージ通りにするのはなかなかうまくいかないことを実感した。今回はせっかくなので、陶芸用絵具をつかって色もつける。「一度塗り始めると止められないよね」と遠木さんがおっしゃるように、ここまで、と決めないと踏ん切りがつかない。すぐに終わるのかと思っていたが、15㎝くらいの湯飲みでも、形ができあがるまでに4時間かかった。イメージしていたのとは少し違っていたが「いい感じじゃん」と、できあがった形を見て遠木さんから感想をいただけたので、私は思わず照れて笑顔になる。それからは完成品を早く見たい、という気持ちでいっぱいだった。2週間後に作品が完成した。割れずにきれいに焼きあがっていたのを見て、心の底から嬉しさが込み上げてきて、思わず歓声を上げる。

土には決まった形が最初からあるわけではない。湯飲みをつくっているときも、このくらいの大きさなら持ちやすいとか、飲みやすいとかをその場で考えて形を変化させていった。思いついたままにつくったので、再びおなじものはつくれない。少し不格好ではあるけれど、自分でつくって、形にしたので誇らしくも思う。自由に形を変えられるからこそ、まずは土をいじってみることが大切だ。失敗したらまたやり直すこともできる。頭で考えるよりも先に行動してみる。つくりだしてから考えたほうが作業がはかどることもあるかもしれない。

土のようなやわらかい発想で、私もつくることに挑戦し続けていきたい。

小さな畑から

今年度から、中屋敷フィールドで小さな畑を拓いて野菜づくりを始めました。なんとなく、畑しごとにもっと近づけたらと思い、初等教育学科4年の砂田真宏君と畑しごとをすることになりました。

持田睦乃（社会学科4年）＝文・写真・イラスト
砂田真宏（初等教育学科4年）＝写真

開墾から種まきまで

本学から歩いて20分ほどのところにある中屋敷で、以前から麦作と稲作をしている畑とは別に、新しく畑をつくることから始めました。私は畑しごとの知恵や知識を何も持っていなかったので、どんな作業も知らないことだらけです。まず3月に開墾と土づくりの作業をおこないました。草を抜き、土を耕し、石灰を混ぜ込み、地面を平らに整えます。鍬（くわ）を持って土を耕す作業なんて、私にとっては小学校の菜園実習以来ほとんど機会がなかったので、なかなかうまく力が入りません。ちゃんと耕せているのか不安になってしまいます。じっさいあとから砂田君に聞いてみると、鍬の入れかたが浅かったそうです。柔らかくした地面に石灰を混ぜ込み、酸性土壌にならないように土をつくりました。

石灰を混ぜてから少し日を置き、4月4日に畝（うね）づくりと種イモの植えつけをしました。30㎝幅に畝をつくり、畝の中心に細く、深めに溝を掘って30㎝ほどの間隔で種イモを置きます。種イモと種イモのあいだに化学肥料と牛糞堆肥をまき、土をかぶせて完了です。

開墾前の１つ目の畑（3 月 20 日）

開墾後（3 月 20 日）

作物が大きく成長してきた（6 月 4 日）

上の 3 枚：１つ目の畑が、開墾や作物を植えることで変化するようす。これからどうなっていくのか、とても楽しみだ

左：4 月 30 日のサラダミックスの芽。間隔が狭く、窮屈そうだ。間引いたものを２つ目の畑に植え替えた。植え替えてちゃんと育つのか不安だったが、しっかり成長を続けている

種イモに肥料がかからないように気を付けるなど、気を配ることがありました。

それから4日後。この日は葉もの野菜の種まきをおこないました。今回まいたのは何種類かの野菜が混じったサラダミックス、バジル、小松菜と半結球レタスです。30㎝間隔で畝に横向きの細い筋をつけ、つけた筋に種をまき、軽く土をかぶせます。この日から一週間ほどは、発芽を見守りつつ、土が乾いたのを確認したら水やりをしました。

作物と、そうでない「生きもの」

4月15日、砂田君が中屋敷での草刈り時に葉もの野菜の芽が出ているのを確認しました。サラダミックス、小松菜、半結球レタスの芽が出ています。私が間隔を気にせずまいたサラダミックスはなんだか窮屈そうに芽を出していて、少しかわいそうなような、いとおしいような気持ちになりました。小さな双葉は頼りなさげですが、これからの成長を考えるとうきうきします。ジャガイモも、この日に一つ小さな芽を確認できました。

そしてこの日にはもう一つ、私にとって大きな出会いがありました。畝に動物の足跡がついていたのです。何の足跡かは私にはわかりませんでしたが、中屋敷ではふだんからイノシシが掘り返した跡などを目にすることが多かったので、この足跡もイノシシのものなのでは、と思いました。イノシシやシカは、売りものとしての野菜を育てる農家にとっては非常に厄介な動物です。でもこの日、足跡を発見した私にとっては、この足跡の持ち主はまだ厄介な生きものではなく、自分と中屋敷の自然をつないでくれるパイプのような存在でした。今までも中屋敷で生きものやその痕跡に触れる機会はあったのですが、それが自分で拓いた畑に現れたと思うと、生きものとの距離がグッと近づいたように感じました。「この足跡の主は誰なのだろう、また来るのだろうか」という期待と、「対策をしないと、ジャガイモが根こそぎ食べられてしまうかもしれない」という不安が入り交ざった複雑な気持ちで足跡を均し、畝を整えて帰りました。

4月の下旬から、作物はどんどんと大きく成長していきました。バジルは種まきの時期が良くなかったのか、水が足りなかったのか、確かな理由はわかりませんが芽を出していま

中屋敷でであった生きもの ：哺乳類

アカネズミ

小屋の池に面していないほうの窓に設置したセンサーカメラに写りました。数カ所に分けてエサ（ヒマワリの種）を置いて、小屋の中で待機しながら来るのを待ちます。私はまだ撮影の場に立ち会えていないので、空いた時間を見つけて夜の畑のようすも観察していきたいです。（5月25日）

ニホンジカ

小屋の前にある池に、シカが水を飲みに来ているようすをとらえることができました。池の周りには動物の足跡がたくさん残っていて、この池が動物たちの水飲み場になっていることが分かります。このシカ以外にも、多くの動物がここを利用しているのかもしれません。（5月27日）

せん。それ以外の葉もの野菜とジャガイモの芽が出揃ったころ、虫の被害が出てきてしまいました。ジャガイモの葉を食べるニジュウヤホシテントウです。テントウムシというと、私にとってはアブラムシを食べてくれる益虫というイメージが強かったのですが、種類によっては植物食性で、害虫にされてしまうものもいるそうです。この畑では農薬を使わず野菜をつくりたいと考えているので、虫も「見つけて手で取る」という対処法をとることにしました。

問題は虫だけに留まりません。今度は動物によってジャガイモが掘り返されてしまったのです。今回も、シカなのかイノシシなのかはわかりませんが、根っこから掘り返されていたり、かじられていたり、大きな動物がジャガイモを狙って畑に入ったことは間違いありませんでした。生きものが畑に増えて、私と畑周りの自然とが近づけるのは嬉しいことなのですが、せっかく植えた作物が荒らされていく状況をそのままにしてはおけません。畑の周りに竹の杭を打ち、ネットを張って対策を施しました。また、夜中に畑を訪れた生きものを確認できるように、センサーカメラを仕掛けて、畑の観察を始めました。まだ生きものが写ったことはありませんが（5月25日、センサーカメラにシカとアカネズミが写り、5月27日にシカが写りました）、今後、夜の生きものの姿を見ることができるのでは、と今からたのしみです。

畑を広げる

はじめに拓いた畑だけでは育てたい作物を植えきれなかったため、もう一つ畑を拓くことになりました。こちらも同じように土を耕し、石灰を混ぜ込んだのですが、一つ目の畑よりも土が軽く感じられました。少し土の質が違うようです。どのように、なにが違うのだろう。もっと近づいて、違いを知りたいと思いました。小さな違いに敏感になれば、畑のことをもっとよく知れるのではないかと考えたからです。しばらくして二つ目の畑に夏野菜の苗を植えた日に、両方の畑の土に素手で触れて、ちゃんと違いを確かめてみることにしました。

土を触って比べ、分かったことがあります。一つめの畑の土は、二つ目の畑に比べ、粒が少し小さいようです。泥に近いような細かい

中屋敷でであった生きもの：昆虫

ニジュウヤホシテントウ

ジャガイモの葉を食べてしまう害虫のテントウムシです。ジャガイモが成長しはじめてからは、毎日のように目にするようになりました。葉の裏や、葉と茎のあいだなど、見つけにくい場合もあるので注意が必要です。葉を食べたあとに独特の食べ痕（あと）が残るので、私はいつもその食痕を目印にして探しています。（5月23日）

ギンヤンマの仲間？

5月30日、朝6時半ころから1匹のトンボが池に産卵に来ているようすを観察できました。写真と図鑑を見比べて、トンボの名前を調べようと思ったのですが、まだ詳しい種名は特定できていません。ギンヤンマに似ているのですが……。今後も観察を続けていきたいです。（5月30日）

土で、作業後手を洗ってもなかなか綺麗になりません。二つ目の畑の土は少しざらざらとしていて、手は水で洗うとすぐに綺麗になります。耕したときの重さの違いは、この土質にあるように思えました。二つの畑のあいだに、距離はそうありません。なぜこんなに違うのか、土の質が違えば育てやすい野菜とそうでない野菜があるのか、私の疑問は広がっていきます。

「はじめて」が溢れる4年目の都留

畑で育てる野菜の種類は日々増え続けています。最初に植えたジャガイモ、葉もの野菜にくわえ、ナスやトマト、カボチャなどの夏野菜、サツマイモ、ラッカセイなどを新たに植えました。収穫が楽しみになると同時に、それぞれ育て方が違うので、今後苦労も増えていくでしょう。5月にもなると畑を拓いた3月下旬に比べ、朝の早い時間から気温が上がるようになりました。陽が昇りきる前から畑しごとを始めるようにしないと、暑くてすぐにばててしまいます。日本には四季があって、畑の野菜一つひとつに四季に合わせた育て方や気を配らなければいけないことがあって……、「畑しごと」と一言で言っても、考えなければならないことは山ほどあることに気づきました。

自分で鍬を振るって拓いたからなのか、少人数で管理しているからなのか、頭のなかにすぐ畑のことが浮かんでくるようになりました。書店をなんとなく歩いていて野菜の育て方に関する書籍が気になるようになったり、朝寝坊をして畑の水やりにいけなかった日の日中は「雨が少しでも降らないかな」と、いつもなら嫌う雨を待ち遠しく感じたり、中屋敷での畑しごとや生きものの観察を通して、自分の考えや世界が広がってきていることがわかります。

都留での生活も、来年の3月で終わりを迎えます。それまでに私が畑で出来ることはほんの少しかもしれないし、もし畑がこの一年で潰れてしまえば、むしろ畑を拓かなければ良かったと思うことになるかもしれません。あと一年なのに、という迷いや不安や後ろめたさのような気持ちはいつもあります。それでも知らなかったものごとを知ることや、経験がないことをやってみるのは楽しくて仕方がないのです。

都留市の旧５町村を巡る（1）
旧東桂村

梅 がつなぐ過去・未来

1954年４月29日、旧谷村町、宝村、盛里村、禾生村、東桂村が合併して、都留市が誕生した。
「都留市の旧５町村を巡る」では、各地域を渡り歩き、気になる人やモノから、その地の風土を探っていく。
１回目は、鹿留 古渡地区にて栽培されている「梅」がテーマ。じつは、都留の市の花は「梅」だ。合併前の旧５町村を梅の五弁の花が表現している。まだ見ぬ土地を、梅から探求してみるのも面白そうだ。

崎田史浩（社会学科４年）＝文・写真

都留市の旧５町村

（1）旧東桂村

1893年に桂村が分村して西桂村と東桂村が誕生。地名の由来は東半分にわかれたことから。旧東桂村は、夏狩村、十日市場村、鹿留村、境村で構成される。

その地名を「こわた」と呼ぶことすら、今回の取材をするまで知らなかった。都留市鹿留に含まれる古渡地区には、尾崎山の西の裾に沿って集落がある。古渡の梅についてあてがなかったため、「東桂地域コミュニティセンター」を訪れて情報を仕入れることから始まった。すると、古渡で三枝秀雄さん（74）が梅を栽培しており、奥さんも梅干しや梅ジャムづくりに熱心だということがわかった。電話をかけて取材をお願いしたところ、さっそく梅畑を見せていただけることになった。

大学から自転車で約10分、国道139号線の左に「古渡」と表記された標識が設置してある道に入っていくと、鹿留川にかかる古渡橋がある。橋を渡って直進した道に入ると三枝さんの梅畑が広がっている。開花期には、梅の花が一面に咲き誇り、美しい景色が広がるのだろう。「古渡で梅が密集しているのはこのあたりくらい」と三枝さんが教えてくれた。もちろん、花も見ごたえがあるのだが、古渡の梅は花の観賞が目的ではなく、実を収穫するためのものだ。手入れがされている梅の木は、高さが2m前後で統一されており、枝の剪定も適度にされている。まさに、「実を出荷するため」の梅がそこにはあった。

「あそこに山があるから、この地域は日の出が遅くて、日の入りが早い」と、三枝さんが尾崎山を指した。「冬になると、もっとも遅い日の出は9時15分ころ」になるくらい、日照時間が短い土地のようだ。だが、これが梅を栽培するには適した気候条件だという。三枝さんが生まれたときには、すでに実家には梅があったとお聞きした。昭和30年ごろには、実の収穫のために当時の都留短期大学の学生をアルバイトで雇っていたくらい、収穫期は繁忙を極めていたそうだ。

古渡の梅には、いくつか品種がある。この土地に適しているという「小梅」。毎年必ず実をつける「養老」。そして、天候に左右されやすいが、大きな実をつけて肌もきめ細かい「白加賀」がある。三枝さんは、毎年6月中旬ころに梅を収穫して梅干しやジャムをつくっている。古渡には、120戸ほどの世帯があるそうだが、今でも十数軒が梅の栽培をおこなっている。収穫した実は自家消費するほか、青梅を市場に卸しているという。お話を聞きながら、手づくりの梅干しをいただい

三枝さんからいただいた梅干し。左が「小梅」、右が「白加賀」。小梅は一口サイズで、カリカリした食感を楽しめる。白加賀は、肉厚でおいしい

た。「白加賀」の梅干しは、肉厚で実も大きく、ほどよい塩加減だ。梅干しの赤みは畑で採れたシソの葉だけで着色されている。まさしく、古渡の恵みが詰まった本物の味。その地域ならではの食との出会いは、古渡の梅の魅力をいっそう引き立てる。

知恵の実――「梅」という選択――

山に面した場所を中心に、梅畑がつくられている古渡。田んぼや畑のそばにも梅が何本か並んでいるのを見かけた。地域一帯に梅の広がりが確認できるが、いつから梅が栽培されるようになったのだろうか。三枝さんの梅畑に隣接した土地で、梅の手入れをしていたおじいさんに聞いてみた。すると、「昭和20年以降だった」と答えが返ってきた。どうやら、地域で一斉に栽培に乗り出したのがそのころからだったようだ。

けれど、なぜ梅だったのだろう。日陰がよいとされる梅の栽培に適した土地だったこと以外に、「このあたりは石が多くてコメや野菜をつくりにくかった」と、地理的な課題もうかがえた。山に面した地域だからこそ、農業も一筋縄ではいかなかったのだろう。古渡で生きていくための知恵と決意が梅には込められていたのだ。

昭和20年以降から栽培されはじめた梅は、昭和50年代には古渡を活気づけた。古渡の自治会長を務める秦仁（はたきとし）さん（69）によると、「全盛期には、沼津からも業者が買いつけにきたほどの収穫量を誇り、豊作の場合、一本の木から50kgもの実が採れた。また、古渡で「志村商店」を営む志村繁（しむらしげる）さん（78）は、「当時は、会社を休んでもでも梅をもいでいた」そうだ。じつは、梅自体はずいぶん前から栽培されていたのだが、実が高値で取引されるようになった昭和20年以降、古渡全体でこぞって梅の栽培が始まったという。

ただ、最近は収穫量が減っている、とお話をうかがった全員が口にする。とくにここ7年は厳しいようだ。因果関係ははっきりしないが、受粉を手助けするミツバチが花に寄りつかなくなったことや、開花時に降る雪が花芽に悪影響を及ぼしているのではないかと考えられている。

「昔は一本の枝に垂れ下がるように梅の実が生（な）っていたけど、今ではあちこちにちょっとずつ生っているのを取らなきゃいけない」。こう語るのは、梅農家の三枝信明（さえぐさのぶあき）さん（85）と和美（かずみ）さん（82）。一本の枝に垂れ下がるようになっている状態を「鈴生り」と呼ぶ。今では多くみられない光景のようだ。「あのころは業者がたくさん来て賑やかだった」と話す和美さんの寂しそうな表情が胸に残った。

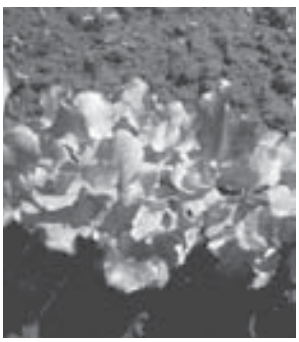
未来をつなぐ過去の歩み

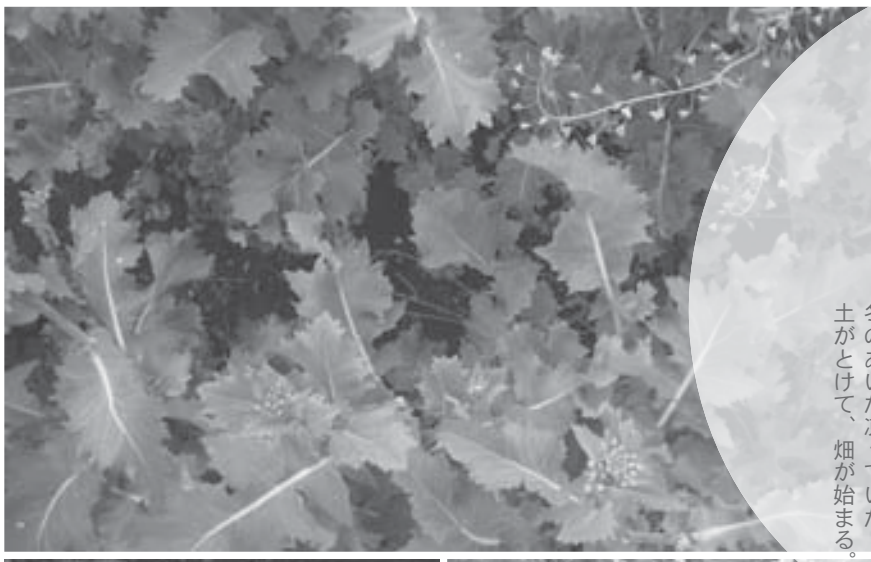
地域の歴史は、さまざまなモノに投影されている。古渡の梅もそのひとつだ。梅畑で見た、収穫を今か今かと待ちわびるかのように実っていた梅の実は、古渡の風土を色濃く映す鏡でもあった。過去の記憶を探ることで、今見える世界の受け止めかたも変わる。

現在は、利益を見込めない経済的事情などで、昔ほど手をかけられないのかもしれない。惜しいなと思っても、梅とともに生き続けるのは地域に暮らす人である。次の世代には、梅はどう受け継がれていくのだろうか。

先人の築いてきた歴史を知ることは、今だけでなく、未来を構想する手段ともなりうるはずだ。その地の歴史と向き合うことを、これから都留市の旧5町村を巡る視座としていきたい。

参考文献
『都留市地名事典 第22･23号「郡内研究」合併号』
都留市郷土研究会／2012





宮原の畑を耕す

春、
冬のあいだ凍っていた
土がとけて、畑が始まる。

大学に入ってからこれまで、わたしは都留市法能宮原（みやばら）地区で田んぼと畑を耕してきた。手が足りず、田んぼは今年断念する。耕さなかった田んぼはもう、一面草に覆われていた（5月1日のこと）。

畑のまわりはこのあたりに暮らす人たちの耕す田畑が広がっている。だから畑にでているといつも、通りがかった人に声をかけてもらえる。余った種や収穫したものを分けてもらい、種を蒔（ま）く時期や方法を教えてもらうこともあれば、もっと土寄せをしなきゃだめだとか、草が生えて畑がもったいないとか、あきれられたり叱られたりすることも多い。

わたしが畑へ行くのは、なんとか畑をまわさなければと思うからだ。まわりに迷惑をかけないように畑を維持していかなくては、という責任がある（あまり果たせていないが）。でもそれだけではなかったと、この春になってあらためて感じている。

冬のあいだ凍っていた土は、4月になるとふっくらとして、目に見えて畑が起きだすのが分かる。4月下旬にもなると、あるときを境にぐんと緑が濃くなり、それまでの畑の穏やかさに気づくことになる。春の始まりも劇的だけれど、初夏にかけてぐんぐん勢いを取り戻してゆくこの時期の畑は、本当に力に満ちている。

毎年春になると冬菜の収穫が始まる。秋に種を蒔き、小さな株のまま冬を越した冬菜は、暖かくなると凍てついていた葉をのびのび広げて、そのうちすいすいとやわらかい花芽を伸ばす。これをつぼみのうちに摘みとって食べるとおいしい。収穫は初夏まで、1ヶ月以上つづく。うまく摘んでいけば、夏まで収穫することができる。摘むのが追いつかなくなり本格的に花が咲くようになると、今度は種を採る。そしてすぐにまた、種を蒔く季節になる。

この冬はいつも以上に寒く、冬菜がちゃんと冬を越せるのか、春になったら前の年と同じように収穫することができるのか、心配で、なかばあきらめてもいた。だからこの5月1日、今年初めての冬菜が摘めたときは、本当にうれしかったし、安堵した。つくったことのないものを試してみるというのも畑のたのしみだけれど、同じことを同じように、毎年きちんと繰りかえしていけることが、気がつけば自分にとって重要なことになっている。

＊　＊　＊

耕さなくなり、草に覆われていた田は、数日後うそのように、きれいに田植えがされていた。わたしたちができなくなっても、ほかの誰かがまわしていく。ホッとすると同時に、さびしさもあった。

畑も、この先続けられるかは分からない。けれどこの一年は、精一杯耕してみたい。

右頁写真：①葱（ねぎ）を植え替える（4月9日）／②この春一番に種を蒔いたちぢれ小松菜（5月10日）／③昨年採った種を蒔いたサニーレタス（5月13日）／④初めて試みるつるなしいんげん。5月5日に蒔いたものの芽がようやくでそろう（5月17日）／⑤花芽がでた冬菜（5月7日）。5月25日には花が咲き始めていた（⑥）／⑦じゃがいもの芽がでた（5月10日）。じゃがいもを植えるのは「桜の咲くころ」と教わった。今年は例年よりずいぶん遅く4月10日ごろになった

香西恵（社会学科4年）＝文・写真

土にふれた、そのさきに

私たちは、新しいものにふれるというより、
ずっとそこにあったもの、身近にあったものを、
辿りなおしたという手ごたえがあります。
足もとに目を向けること。
それは、きっかけをつかむまでは見落としてしまいがちかもしれません。

自分のこと、誰かのこと、昔のこと、今のこと、どこかのこと。
「土」を頼りに、「都留」を読み解くなかで、
さまざまな出会いや経験がありました。

土を耕し、農という営みを「はじめて」自分のなかに蓄えていく経験。
まちなかにたたずむ土蔵から、「昔の断片」を知る。
陶芸から土を知り、表現の「カタチ」にふれる。
好奇心の赴くままに、見慣れていたコケとの「距離」を測り直す。
自分の日常を規定しだした畑との「付きあい」をあらためて振り返る。
地域の歴史や暮らしの変遷を通じて、「未来」に思いを馳せる。

これから都留を駆け巡り、何と出会えるのでしょうか。
「驚きは、いつだって足もとに。」
これが、土にふれた私たちの想いです。

都留市鹿留古渡地区にて撮影　2012.5.16

くらしを彩るつどい

～老人クラブの活動から～

対局に熱中する囲碁教室のみなさん

自分より3、4倍長いときを生きて、数知れない経験を重ねてきた人々。そんな人たちが辿り着いた、今を前向きに生きる姿から、何か学べることがあるのではと思い、有志の参加者で成り立っている、2つの老人クラブにお邪魔させていただいた。

平井のぞ実（英文学科４年）＝文・写真

負けず嫌いの集まり

5月6日、都留市上谷にある文化会館の1階で開かれていた囲碁・将棋教室を訪ねた。会場の入口に来ると、カシャカシャと碁石が混ざり合う音が聞こえてきた。会員のかたがたが二人一組で碁盤をはさんで向かい合い、碁を打ち合っていらっしゃる。悩ましい表情で碁盤を見つめたり、腕を組んで考え込んだりと、誰もが真剣に勝負に取り組んでいるようすがうかがえた。そのなかで、ときどき誰かが歌を歌ったり、二言三言交わされた会話から笑いが起こったりしていて、雰囲気はとても和やかだ。

「勝ちたい！　自分はあの人よりできる！と思っている人ばかりなんですよ」

囲碁教室の会長である佐藤博美（さとうひろみ）さん（80）は、会員についてこうおっしゃった。「負けたら、悔しくて夜眠れないときもある」というほどのみなさんの熱中ぶり。「今日はお昼ご飯を食べる間も惜しかったから、今からなんですよ」と笑う佐藤さん。会場に入ったとき、後方の長机の上にポツンと置いてあったお弁当を思い出した。

佐藤さんは、若いころから囲碁が好きで、対局で段位を積むため東京に出向いていたらしい。現在は日本碁院の定める段位で五段を保持していらっしゃるそう。そのほかの会員のかたも、もともと囲碁をやっていた人ばかりで、大会などで顔見知り同士ということが多い。お話を聞くなかで、佐藤さんは繰り返し「一度囲碁の楽しさを知った人はいつまでも止められない」とおっしゃっていた。また、このクラブは佐藤さんにとってどんなものですかとお聞きすると、少し考えたあとに「いい時間つぶしになってます」と返ってきた。

囲碁教室のみなさんの平均年齢は70代後半で、退職なさったり、ふだんはお家で農作業をなさったりしているかたがほとんど。若いころと変わらずに夢中になれるものが、いつの間にか時間つぶしになっている。みなさんにとっては自然なことのようだけれど、実りある時間を生みだして、人生を自ら満たされたものにしている姿が力強く、私にはとても眩しく映った。

開催日時・場所

○囲碁・将棋教室●　毎月第１、第３日曜日・午前９時 30 分～ 16 時

♪民謡教室♪　毎月第２、第４木曜日・午前 10 時～ 12 時

場所はどちらも都留市文化会館１階　※７月から変更有り

謡う、喋る

5月10日、この日は民謡教室を訪れた。会場は囲碁教室と同じ文化会館。入り口から、高らかな歌声と三味線の音色が耳に届く。民謡教室の会長の三枝力（さえぐさつとむ）さん（83）を中心に、お話を伺うことができた。挨拶を交わしてすぐ、三枝さんに「お国は？」と尋ねられた。「兵庫県です」と答えると、「兵庫県の歌にはどんなものがあったかな」「確か前にやったことあるよねえ」と会話が飛び交う。下調べしてから足を運べば良かった、と思ったのと同時に、本当に民謡が好きなかたがたの集まりなんだな、と囲碁教室を訪ねたときと同じ印象を受けた。

みなさんの入会のきっかけは、民謡が好きであったこと、タウン誌に紹介記事が掲載されていて興味を持ったこと、健康増進を図ろうと考えたこと、などさまざまだ。教室は午前10時から午後12時まで開かれていて、そのあいだ、歌うことはもちろん、ときには雑談で盛り上がることもあるそうだ。みなさんに、この教室の魅力についてお聞きしようと考えていたが、口々に「民謡が昔から大好き」「声を出すことで物忘れの防止になる」「おしゃべりが楽しい」「人と接する機会が持てて楽しい」といきいきした表情で語り出して下さったことで、教室の存在の大きさが伝わってきた。民謡という、表現を目的とした文化クラブであるためか、はつらつとしたかたばかりだ。

毎年3月には「おさらい会」という、老人クラブの詩吟や踊りの部門と合同の発表会があり、今年の4月には甲府で開かれた県の文化協会の主催する発表会に初めて参加したそうだ。また、老人福祉施設へ慰問に出向くなど、対外的な活動もおこなっている。

民謡教室のみなさん

活力に触れて

取材を終えて、自分のお年寄りへの見かたが変わった。以前は「お年寄り」というと、若いころに比べて身体に気を遣って生活することで活動範囲が狭まったり、働くことでの社会参加から引退して生活の中心だったものがなくなり、暮らしの張りを保ちにくくなる。そんな、生涯のなかで少し消極的な時期というイメージがあった。けれど、２つのクラブを訪ねてお会いしたみなさんは、心の底から楽しいと思えるものに出会い、自発的に取り組んでいらっしゃって、部活動に打ち込む私たち学生と何も変わらない。それは、人生の先輩でありながら、同志ともいえる姿だった。

どんな年齢の人でも、目の前の「今」の使いかたしだいで、その人の生きる時間に彩りを添えることができる。自分自身を振り返ると、やるべき課題もやってみたいことも、いつかそのうち、と先延ばしにしていることが多かった。老人クラブのいきいきしたみなさんと出会い、「今」と向き合うエネルギーをおすそわけしていただいた。

儀秀稲荷例大祭の1日

ステージを見る市民や学生たち。境内は人々の交流の場となった

昭和24年5月13日に発生した火災は、都留市の下町の一部、横町の全域、栄町、田町の一部を焼失する大火事となり、谷村の大火と呼ばれている。
この火事のなかで、木造の小さなお社だけが奇跡的に焼け残った。そのお社が西涼寺（さいりょうじ）にある儀秀稲荷社（ぎしゅういなりしゃ）である。大火災以来、儀秀稲荷社は厄除儀秀稲荷として、毎年5月13日に、祈祷のお祭りである儀秀稲荷例大祭がおこなわれている。
今年は露店商が出店しないため、私たち学生が出店・出演側として参加し、伝統あるお祭りを盛り上げるお手伝いをさせていただいた。

水野孝英（社会学科2年）＝文・写真

昨年の夏、大学の講義で、富士急行線都留市駅のすぐ近くにある三町商店街を歩き、お店のかたから商店街の歴史やお客さんを呼ぶための工夫を聞いた。じっさいに見て、聞いて、歩いてみると、さらに商店街のことが知りたくなった。そこで、同じまちに住む私たち学生も何か商店街のために出来ることはないかと、同じ思いをもつ学生5名で話し合い、ともに商店街と関わってきたのだ。

商店街の方々と会議をするなかで、商店街と学生で儀秀例大祭を盛り上げようという話になり、私たち学生が参加させていただけることになった。私たちは本学の学生をお祭りへと呼び込み、お寺を学生と市民のかたが交流できる場所にしようと決めた。大学の外で活動をし、地域と関わりたいという学生たちがいたことと、お祭りに学生が来ることで活気が出ることが決め手となった。

学生団体に声をかけ、出店・出演ともに3団体、計6団体の参加が決まった。当日は、境内には学生団体、商店街、商店連合会の合わせて8つもの露店が出ることとなった。境内を囲む露店は、とくに子どもたちにとって

は欠かせない。これらの露店によってふだんは静かなお寺が、賑やかなお祭りの会場へと一気に姿を変えた。半数近くの露店を学生が出店できたこと、そして会場がいかにもお祭りらしい雰囲気を出し始めたことで、1日を盛り上げられそうな自信がわいてきていた。私たちが商店街の法被（はっぴ）を着て、露店の手伝いをしていると、「お疲れさま」とさまざまな人が声をかけてくれる。おそろいの法被を着たことで、地元のかたとの一体感を味わいながら多くのかたとお話することができた。

お祭りには、人々の活気ある声や食べもの、流れる音楽や遊びといったわくわくする要素と、直接人と触れ合う機会があふれている。

住職と消防団員が境内に集まり、式典が始まる

だからこそ、私たち手伝う側も楽しいのだ。

◇

儀秀稲荷例大祭は、谷村の大火をきっかけとして始まった。そのため、もう二度と大火災が起こらないようにと祈祷をおこなう式典がある。式典には住職さんだけでなく、消防団員の方々も境内に集まり、厳粛な雰囲気があたりを包み込んだ。

何十年も前にこの地で大火災があったという事実は、今も例大祭を通して伝えられる。このお祭りに参加するということは、都留に続く歴史と出会うことなのだといえるのかもしれない。谷村の大火のような祭事の起源や由来を知ることで、過去からのつながりを直接感じることができるからだ。地元のかたにとっては当たり前の事実かもしれないが、県外から来た私たち学生が、地域の歴史や風習に触れられる機会は貴重である。

式典のあとに始まるのは学生団体による演奏だ。学生バンド、マンドリンクラブ、吹奏楽部が出演した。徐々に日が沈んでいくなか、境内にゆったりとした音楽が流れる。手拍子はもちろん、アンコールまで起きた団体もあった。大成功だ。演奏が終わるころには、どの露店も片付けが終わっていた。学生も帰りだし、あたりは少しだけ静けさを取り戻す。

しかし、お祭りはまだまだ終わらない。夜には地域住民の参加するカラオケ大会が開かれるのだ。会場に、どこかで聞いたことがある演歌が響き渡る。ここからは大人たちの楽しみの始まりだ。私たちは役目を終え、提灯が照らすお寺をあとにした。

◇

商店街のかたとお祭りについて会議をしていた時、「当日はあまり人は来ない。期待はしないほうが良いよ」と言われていた。しかしじっさいは、会場は人々で賑わい、活気に満ちた場になったのだ。反省会で私たちは「希望が見えた」という言葉を聞くことができた。前向きな発言を受け、本当に一つの企画を成し遂げることができたのだという事実をしみじみと感じた。素直に嬉しい。これからも私たちは、商店街のかたや地域のかたとともに考えながら、多くの人の元気につながるような活動をしていきたい。

ひろいもの

4. 鹿の角

鹿の角をひろえたら、宝物だ。
角を探してこの春山を歩いた。

香西恵（社会学科４年）＝文・写真

今度は角をひろいたい、と思ったのは、前回、鳥の巣を見つけようとして、見つけられたのがきっかけだ。もしかしたら角だって、見つけようとしてみれば見つかるかもしれない。そう思うと、角はひろってみたいものになった。

鹿へ近づく

鹿の角は毎年生え変わる。それも春先が多いらしい。「角を見つけたい」ということを話すと、いろいろな人が鹿にまつわって自身の知っていることを教えてくれた。

鹿が沢へ降りてきて水を飲もうとしてかがんだときに、角がぽろりと落ちること。鹿の年齢によって角の形や大きさはさまざまで、なかでも「四尖（よんせん）」や「五尖（ごせん）」と呼ばれる、先が4つ5つに枝分かれしているものはとくに立派なのだということ。五尖の角を持つ黒い毛並みをしたエゾジカの格好良さ。あるいは道志の川にいけば鹿の首ごと見つかるかもしれないこと、角は加工すると臭いこと……。

大学の職員のかたや守衛さん。身近な人の口から鹿にまつわる話がでてくるたびに、角への執着を新たにするとともに、鹿の話題が広がることに驚いていた。わたしは「角をひろう」ということをとおして鹿に近づくことになったけれど、周りの人に話を聞いてみれば、ごく自然に鹿の話がでてくる。どんなささいなことでも鹿について語ることが、どの人にもあった。

山へ通うこと

「角を見つける」という目的のもとに山を歩く。ほかのひろいものとは違って珍しいうえに、誰かが先に見つけたらひろわれてしまうだろうから、本当に見つけようとするならとにかく足繁く通うしかない。角が見つかったらもちろん嬉しいけれど、そのために通うことで、山が変わっていく様子を間近に見ることができ、知っているようで知らないものとの出会いをていねいに重ねることができたのが、大きな収穫だったかもしれない。

4月18日には蛸（たこ）のような形をしたキノコが落ちているのを見つけた（帰って図鑑で確認

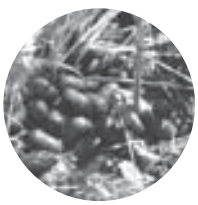
してツチグリだと分かる）。「ホタルカズラ」の花もそうだ。この時期、「ホタルカズラ」という青い花が咲くことは知っていたが、ほんものを見たのは気づけば初めてだった。

写真で見たことのある生きものを、じっさいに野山で見つける。ホタルカズラの花が、まわりの勢いを増した草のなかでどのくらいの小ささで、青や紫の花色がどんなふうに見えるのか。胞子を飛ばしたあとのツチグリが道にどんなふうに転がっているのか、乾燥したら「蛸」の足がどのように変化するのか。じっさいに見なければ、本当にそれを知っていることにはならないのだと、今更ながら気がつくことになった。

角にたどり着く

しばらく山歩きに行かれずにいた5月下旬、思いがけないところで角を手に入れることになった。5月23日、編集部員の取材に同行して、古渡地区の梅農家のかたに梅畑を案内していただいた折のこと。鹿にサザンカの木の葉が食べられてしまう、というお話を聞いたので、鹿の角を集めていることを話したのだ。すると、たしかこのあたりにあった、

シカの食べあと


シカのフン

ツチグリ

ホタルカズラの花

〈ひろいもの記録〉実施日：3月19日、4月13日、4月18日、4月20日、4月24日、5月4日、5月28日、5月31日／場所：おもに「都留自然遊歩道」を歩いた。第1回、第5回は中屋敷フィールドへ／右頁写真：いただいた角。枝分かれの数で持ち主の年齢が分かるらしい。4つに分かれているので4歳か。草刈り機で切ってしまった跡がある。表面は白と茶で、細かな凹凸がある。すべらかで、ずっしりと重いのが嬉しい。

と言われて探してみると、畑の一角、桐の木の根元に、角があった。ついこのあいだ草刈りをして、硬いものが当たったと思ったら、角だったという。あれよあれよと、角をいただいてしまった。

まさかこのような形で角にたどり着くとは。念願の角が手に入った（それも、この春取れたばかりの新しいもの）信じられないよろこびと、いっぽうで「自分で見つけた」とはいえない口惜しさがあった。

角探しは角にたどり着いたことで、一応区切りを迎えた。けれどやっぱり、本当の願いは自分で見つけることだ。生い茂った草のなかで、どんなふうに角が隠れているのか、露にぬれているだろうか。きっと自分で見つけなければ知ることができないことがある。取材に行くたび足をのばすたび、知らないことが広がっていく。

都留の四季をたどるのも、もうこの一度きりだ。ここで角をひろうことができるだろうか。ひろいもののゴールを胸に、あと少しのあいだ、このまちで探検を重ねたい。

起き上がる朝

―リフォームの根源―

数え切れないほどの趣味をもっていて、はつらつとした毎日を送っている遠藤静江（えんどうしずえ）さん（79）。その姿に私たちも元気をいただいています。
本誌71号では和服リフォームを始めたきっかけのお話をうかがいました。今回は、さらにリフォームに焦点を当てて、遠藤さんの子どものころのお話、そこからリフォームをし続けるもうひとつのきっかけを紹介します。

これ（ねんねこ）をつくる時代っていうのは、私の実家では、カイコを飼ったの。養蚕ね。で、これ（布）のキレのできかたを知っているわけ、私は。カイコを飼って、私たちは子どもだけどそれに参加してたわけ。たとえば桑をカイコにあげることとか。あとは「こくそ」って知ってる？　カイコのフンのことなんだけど、それが溜まってくるとときどき取り替えなきゃいけなくて、そういうこととか。で、糸を吐き出すとカイコが透き通ってきて、するとそのカイコを全部拾って、そのカイコが「繭」をつくる機械ね、「回転ムズ」っていったけど、置いておくの。それでいく日かたつと、繭が硬くなってできあがるわけ。出荷するわけね。ところが、その出荷するときにカイコがなかで死んでたりしている場合には出荷できなかったの。例えばカイコがなかで死ぬとシミができる。それからカイコが2匹入っていたりするのがあったりとか、そういうのは規格はずれだからはじき出される。もったいないでしょ？

そういうのはもったいないからうちで使うわけ。これを鉄鍋で煮るわけ、煮るとね、だんだん柔らかくなるの。それをね、畳を掃くほうきのようなものでかきまぜると、ほうきの先に糸が絡まってくるの。その5つくらいを一緒に絡めて糸車でころころころころと、糸になっていくわけ。すると最後に、サナギっていうんだけど、それがいっぱい浮くんだよ。で、その糸を今度は整経して、そのころは手織りで、ぱったんぱったんと織るわけ。それで白というかちょっと黄色いような色に織り上がる。だから、そういうふうに、手を掛けてこれができたってことを私自身が知っているわけ。で、私は今そういう着物をいく着か持っています。ちゃんと大事に。

織ったのは、私の母の母、おばとかで、私の成人式の着物くらいのものはみんなそういうふうにしてつくったものなの。だから、着物の布に対しての愛着っていうものは、買ったものと違うから、うんとあるわけね。自然に「もったいない」とか「無駄にできない」っていうものが、体に染みついているわけよ。

だってカイコ飼うのが嫌でねえ。こどものときね夏休みに遊んでるのにさ、カイコ飼ってるうちは子どもだって遊べないのよ。みんなが泳ぎに行くって言ったってなかなか泳ぎにも行けないくらい、子どもも労働力だから、

写真：カイコの繭。遠藤さんのご自宅で保管されていたもの

繭を着る

祖母は黒い鉄鍋で繭を煮ていた
箒もろこしの穂先で
鍋のなかをぐるぐると
二回三回かきまわすと
五、六個の繭の糸口がすがりつく
俵型のかわいい繭玉は
くるんくるんとでんぐりかえりながら
細い光の糸が糸車へと
おもしろいように手繰られていく
鍋のなかで踊らせれていた繭玉から
やがて一糸まとわぬ蛹が現れた
はだかにされた命の異様な姿と
いじらしさに胸が詰まった
やがて生糸は手機に乗せられた
からからとんとん
祖母の手と足の快いリズムに乗って
丹念に織り上げられ
三丈のみごとな内織りとなった
……（以下71号に掲載）……

――遠藤静江　作

家庭の。だからそういうなかで一枚の布ができたっていうことは、もうほんとね、もう、涙ぐましい努力の結果でできてる。だからそういうことも踏まえてね、リフォームの、ルーツがあるわけよ、根源が。

桑の木を見つけると

そしていま、いまね、私が一番目につくのは、そのカイコを育てるときの桑。桑の木ね、桑を食べさせたでしょ。いま、市内の至る所にその桑が死んでないで生きてるのよ。まったくいっぱい生きてるの。「えっ、あらここにも」それでまたここ切るでしょ。桑っていうのはね、初めは摘むの。それでカイコにあげる。それは初めの春。その次のは木をこう切るわけ、それでそのままあげるの。枝ごとね、そうするとまた枝が出てくるでしょ。そういう木だから、切ったって切ったって、根っこから掘らなけりゃいつまでも生きてるの。その桑がまったく……、目につくの。「あっ、ここにも、ここにも」っていうふうに、ね。もうほんとにそうなのよ。

だからね、このタネ（カイコの卵）はどこにあるのかねって言って。そう、これね、ほんとに2㎜くらいかな。ゴマよりちっちゃいつぶつぶのがね、このくらいの、「たねいた」って言うの。それにブワアーっと産んであるのね。それを養蚕室で、「さんしつ」って言うの、温度かけて、孵化させるわけ。ほんとね、このくらいの「けご」って言うの、小さい黒い毛虫がぐちょぐちょって出てくるのね。それをどんどんどん大きくしてくの。で、脱皮してくの、どんどんどんどんね。そして大きくなってカイコになってくんだよね。そういうのを知ってるでしょ？　もう一回そういうのしてみたいなって、一部だけの、特権がやるものじゃないなって思うの。で、そういうのがあるから、よけいリフォームっていうのに執着するわけ。

遠藤静江さん
（えんどう･しずえ）

昭和７年 11 月 23 日生まれ。元小学校の教師。趣味は詩・和服リフォーム・油絵などさまざま。ニックネームは「シーチャン」。乾物屋の商品を猫があれこれと見るように、いろいろなことに興味をもつ姿から、母親が「乾物屋の猫」と名づけたこともあったそう。好きなことは「何もないところからつくりだす」こと。ご自身の性格については「元気でーす」とおっしゃる。

上中段イラスト：桑の葉と桑の実。７月には桑の実がなる
下段イラスト：遠藤さんの似顔絵。イラストはすべて遠藤さんによるもの

10周年企画　第1回

『ウォールデン 森の生活』を読み返す

10周年企画班の検討会

2012年春、『フィールド・ノート』は創刊10周年を迎えました。10年の歩みのなかで私たちが大切にしてきたことはなにか。そしてこの先、大切にしていきたいこととは。今号から4回にわたって、活動を振り返りながら、これからのあり方を模索していきます。第1回は本誌に反映されているH・D・ソローの思想と、本誌裏表紙の「Glow Wild」のロゴに込められた想いに迫ります。

H・D・ソロー著『ウォールデン 森の生活』
今泉吉晴・訳／小学館／2004

本書は、ソローがウォールデン池のほとりに2年2ヶ月間住み、そこでの暮らしの記録をまとめたもの。ソローはここに、どのように暮らしたのか、つまり、どう生きて、何を考えたのかを綴っている。簡素な暮らしを送ること、移り住んだ森から散歩に出かけ、人間の社会（村）、鉄道、工場を観察することで見えてくるものがある。日ごと遠く、広く歩き、自分が見たものを大切にするソローの思想が、各章に展開されている。

ソローの思想に近づく

今年の3月末から、ソローの著書である『ウォールデン 森の生活』を読み始め、ソローの思想のなかでも私たちの活動に生きているものをみつけるため、三回にわたる輪読会をおこないました。私たちの冊子づくりの活動に照らしあわせて読み解いていくうち、以下の三つのことが、本誌に息づいていることに気づきました。

観察すること

ソローは自ら行動することであらゆる視点から物事を捉え、自然、動物、人、その土地の記憶などを注意深く観察しています。普段なにげなく見るもの、慣れ親しんだものにもつねに新鮮な目を向け、発見や驚きに心を躍らせます。観察は観・るだけではありません。ソローの観察には歩く、聞く、感じる、知ろうとすることが含まれています。私たちもまた、様々なことに興味をもち、新鮮な目で観察することを出発点に活動しています。

考えること

ていねいな観察を通して生まれる発見や気づきを、ソローは見過ごすことなく書き留め、いま目の前に起こっていることについて考察します。自身を引きつけるものに真正面から向き合いたいと欲した彼は、興味関心のあるものを積極的に追いかけるなかで、たとえ小さなことであっても、その背後に潜む意味や事柄を自分らしい発想で問い続けるのです。輪読を進める私たちは、彼のこうした考えかたに共感するとともに、忘れずに持ち続けたい姿勢として取りあげました。

言葉にすること

「私たちの影が、体から太陽に向かって吹き上がる汗を映すのと同じように、かすかでも漏らさず自分の考えを表明しましょう」（第18章「結論」より）

ソローは見聞きし考えたことを、比喩を用いたり、故事を取り入れたりしながら、想像力をはたらかせて綴っており、そのつど彼が抱いていた感情をありあり

Field Note News　2012.3〜5

この春の私たちの活動を紹介します　フィールド・ノート編集部=文・写真

第１回読者交流会　ーここでしか会えない、その魅力ー

３月15日、本誌の読者を招待して読者交流会を開きました。10周年を迎える今年、編集部では「読者には私たちの手がける冊子がどう受け止められているのか知りたい」という思いをきっかけに交流会を企画することになりました。第１回目のゲストは、都留市で美容師をされている門脇法子（かどわき のりこ）さん(31)です。門脇さんは、フリーペーパー『カミカミ通信』を編集・発行し、独自の視点から都留との関わりを深めています。編集部も取材を受けたことがあったので、今回は「読者」としてお話をうかがえないかお願いして本企画が実現しました。やはり、感想は直接聞いてみないとわからないものです。門脇さんが初めて冊子を手にしたのは、「バンカム都留店」に置いてあった69号。そんな門脇さんが毎号楽しみにしてくださっているページが「センサーカメラが写した動物たち」(本号45頁)でした。「(動物が)こんなにいるんだとか、こんなに写せるんだとか。ほんとにわからないから、ふだんの生活では。すごいなあと」。門脇さんにとってこのページは「ここでしか会えない」という魅力が詰まっているそうです。つくり手からはすっかりお馴染みとなっていますが、変わらないからこそ読者にとっては安心感を得てもらえ、都留に生きる動物の確かな存在を感じてもらえていたのです。また、「都留っていう地域に特化しながら、濃い内容を毎号出し続けるってすごいエネルギーだと思う」と門脇さん。その分「ぱらぱらとじゃ読めない。今日はここ読むぞ！」という意気込みがいるのだとか。このお話をお聞きして、自分も編集部に入る以前は毎号冊子を手にすることや、記事を夢中になって読むのが楽しみだったことを思い出しました。今はつくり手ならではの楽しみを味わっていますが、純粋な読者だったときの気持ちが懐かしくなりました。

感想を話してくださる門脇さん(写真中央)

感想をじっくりと伺うことで、意識していなかった『フィールド・ノート』の一面に気づけただけでなく、「これからも『フィールド・ノート』を続けていきたい」という意欲もわいてきました。今後も定期的に交流会を企画し、読者のみなさまとの距離をさらに縮め、冊子をつくり続けていきたいです。

(﨑田史浩)

ビオトープ作業開始

４月24日、今年度のビオトープ作業を開始しました。作業は本学附属図書館横、三ノ側、地域交流研究センター前のビオトープでおこないます。ビオトープでは生きものの多様化を図り、鳥や昆虫が訪れる環境づくりを進めています。毎回の活動は『ビオトープ通信』として学内の掲示板にて発信しています。

プルーンを植えるための穴を掘る

おもに毎週火曜日に活動し、５月８日の第２回目にはプルーンやユズ、フサスグリの木を植えたり、ヒャクニチソウやヒマワリなどの種をまいたりしました。風に飛ばされてしまうほどの小さな種が、時期になると鮮やかな色彩を放つ力を秘めていると思うと感慨深く、一粒ひとつぶが愛おしいような感覚を抱きました。

(別符沙都樹)

甘々娘を育てるのは難しい」。そんな環境のなかあえて育てようとするのは、商品としての市場価値を上げるためだ。

初めの種を蒔いてから三、四週間が経つと、今度は日中に土の温度が上がりすぎないよう、堀口さんは朝一番でトンネルの裾を上げに畑へ向かう。そして日が暮れる前には裾を元に戻す。毎日その作業の繰り返しだ。「日中そのままにしておくと徒長（とちょう）（茎葉が伸びすぎること）が起きて、節が細くなる。それじゃあ大きくならないから駄目なんだ」。

スイートコーンの生長とともに、いくつかの節が出てくるが、一番上の一つを残してほかは折るそうだ。そうすることで大きなコーンを作る。堀口さんが「ちょっとこっちに来てみな」と言いながら畑に入っていくので、慌てて後を追う。立ち止まり「ほら、これが節だ」と言って、下の方の節をぐきっ、と折って見せてくださった。甘々娘の列に沿って歩きながら、あっというまに一抱え分折ると、軽トラックの方に戻っていく。荷台に座り直すと、取ってきたばかりの節に爪で切り込みを入れ、開いて中身を見せてくださる堀口さん。「これがベビーコーン」。ふさふさした黄色いヒゲに包まれて、小さなコーンが横たわっている。根元をぽきり、と折られて出てきたコーンを「食べてみな」と手渡された。生のままだ……と思いつつ口に運ぶ。すると、予想していたような青臭さがまったくない。ほんのり甘くてシャキシャキしている。「おいしいです」と伝えると、堀口さんは笑顔で頷いて「ベビーコーンは生のままサラダにスライスする。その上にマヨネーズや酸味の効いたドレッシングをかけて食べると、これがうまい」と教えてくださった。甘々娘はほかのスイートコーンと何が違うのかをたずねると「粒の皮が薄くて柔らかいんだよ。だから食べた時に口の中に残らない」。甘さの違いではなく、食感こそがおいしさの鍵なのだそうだ。

今回訪ねた市川三郷町と都留市の位置関係

折られる前の節のようす

もう一つお聞きしたかったことを伺った。「甘々娘を作っていてやりがいを感じるのはどんな時ですか」。すると突然、一瀬さんが笑い出し「そりゃあねぇ」と堀口さんを見る。堀口さんも笑って「ああ、そりゃあ、食べてくれた人の『うまかった』に尽きるね」。

お話を伺っているあいだも、奥さんの堀口勝美（ほりぐちかつみ）さん（66）は遠くのほうで作業なさっていたようだ。甘々娘たちは5月下旬の出荷に向けて大切に世話されている。写真を撮るから、と一瀬さんが勝美さんに声を掛けると、手を休めてこちらに来てくださった。

私が最後にした質問は、農業に携わる方にとっては野暮なものだったに違いない。堀口さんたちが甘々娘を育てる先に見たいのは、それを食べた時の誰かの笑顔なのだ。

野生を育む
Grow Wild
都留文科大学
フィールド・ミュージアム
Decent Wildlife and Our Community

裏表紙のロゴに込められた想いを探るべく、ロゴが使われはじめた経緯や、今後本誌に託していきたいことを、本誌発行人である北垣憲仁さんにうかがいました。

◆ソローの思想をはっきりと『フィールド・ノート』に反映させていこうと考えたのはなぜですか？

ソローという人は、森との関わりかたを通して私たちの生活全体を見通しています。さらに、森に住むという実践的な部分から色々な考えを私たちに伝えてくれていますね。私たちも、じっさいに外に出て人に会い生きものを観察することをしています。彼の、本物を見て考える、自分の経験を通して具体的に考える姿勢を、私たちとの共通点としてやっていこう。ソローの思想をひとつの柱にして、考えかたの基礎にあるものとして捉えていこう、ということです。

◆このロゴができるまでの経緯はどのようなものだったのですか？

24号（ロゴを使いはじめた号）が出た２００４年は、地域交流研究センターができてから1年を迎えた年だったんです。そこで、改めてソローの思想を大切にしながら冊子づくりをやっていこうという気持ちを、一般の人にもわかりやすいようにロゴを作って伝えようとしました。ちょうどこの年、今泉吉晴先生（本学名誉教授）が『ウォールデン』を翻訳されて出版されたというタイミングもあったので、『ウォールデン』原著の初版本扉からイラストを使わせてもらいました。

◆「Decent Wildlife and Our Community」の意味とは？

ここでのキーワードは Decent――上品だとか寛大なとか、慎み深いということですね。私たちのテーマである自然と人との交流というのは、Wildlife――自然と、Our Community――生きものも含めた私たちの共同体という二つの言葉から成り立っていて、野生を育むなかで私たち自身も上品に慎み深く生きていきましょう、という意味です。

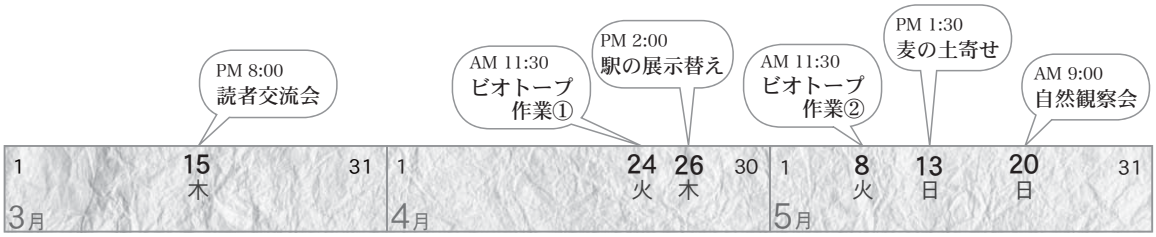
◆さらにこれから『フィールド・ノート』に託していきたいことはありますか？

私たちは地域に出て経験してその意味を言葉にして考える作業をしているんですが、これから先のことも考えていきたいですよね。未来の人や自然が、その人らしくその生きものらしく生きていけるように、思いを寄せながらやっていく必要があると思います。私たちのやっている作業は現時点のものだけれど、これが次の世代、その次の世代へと繋がるものにしていく。時間を超えて未来の人とも会話ができるような冊子にしていけたら、すごくいいなあと思います。

と伝えています。こうした表現は、観察や考察を積み重ねたからこそできるのでしょう。私たちも、ていねいな観察や一つひとつの言葉を大切にしながら、自分の経験を整理して明確にしつつ、自分らしい表現を見つけ、文章にしていこうと思います。

輪読会を終えて

10周年企画の初回に『ウォールデン 森の生活』を読み返すことになったきっかけは、本誌目次に添えてある説明の「ソローの思想」とはどういったものかという疑問からでした。その疑問を解決するために同書を手分けして読み進め、各自担当した章の概略を報告しあい、意見交換をしながらソローの思想を探ってきました。自分たちの活動と照らしあわせながら読むことで気づいた三つのことは、今後の本誌のあり方を模索していくうえできっとその柱となるはずです。私たちは輪読会を通して確認した彼の思想に寄り添いながらも、一人ひとりがソローともまた違う自分らしさを磨き、よりよい冊子にしていきたいです。



▲ フィールド・ノート活動カレンダー

駅の展示替え

4月26日、富士急行線 都留文科大学前駅の待合室の展示を新しく貼り替えました。毎月作成している「フィールドキャンパスだより」や、植物の写真、センサーカメラに写った生きものの写真、大学の授業で作った展示物などが貼ってあります。

待合室は木の質感とぬくもりが伝わるやさしい空間に感じました。電車を待つちょっとした時間に、ふだん気づかない都留の一面に気づくきっかけになればと思います。 (別符沙都樹)

見映え良くするために微調整

麦の土寄せ

慣れない鍬の扱いに四苦八苦

例年の5月よりも少し日差しの強い午後となった13日、中屋敷フィールドにて麦の土寄せをおこないました。私たちは毎年、中屋敷フィールドで二毛作をおこなっています。今回おこなった土寄せという作業は麦の根元に土を寄せ、麦がしっかりと根を張れるようにし、水はけを良くするためのものです。

最初は慣れない鍬(くわ)の扱いに四苦八苦していたのですが、ふと気がつくといつのまにか雑草を刈り取って土を寄せる作業に没頭していました。麦はすでに立派な穂を実らせています。今年は昨年度までよりも麦をまく範囲を広くしたために時間がかかりましたが、貴重な体験をすることができました。 (細矢芽)

自然観察会

5月20日、フィールド・ミュージアム部門主催の自然観察会を都留市尾崎山でおこないました。当日は本学の教員と学生スタッフ、参加者、同伴者を含めた18人が遊歩道を歩き、植物や、動物の食べ痕(あと)を観察しました。貴重な植物については位置情報や株数を調査し、1年を通して観察を続けます。学生スタッフは各自で調査しておいた植物について発表もしました。はじめは学生スタッフと参加者のあいだにぎこちない雰囲気がありましたが、発表を通して打ち解けていき、最後は周りの自然について話し合うことができました。参加者の川村修央(かわむらしゅうおう)さん(19)は、「今まで漠然と自然を見てきましたが、植物や、動物の食痕を見て興味がわきました。もっと自然を知りたいと思います」という感想を述べてくれました。次回は7月7日に『初夏の森を歩こう』というテーマでおこなう予定です。今回は葉の緑が映え、チゴユリなどの白い花が多く咲いていましたが、夏や秋、冬の尾崎山はどんな表情を見せてくれるのか楽しみです。 (細矢萌)

学生スタッフが説明するようす

プチNEWS

『フィールド・ノート』がPDF版で本学のウェブサイトでも見られるようになりました！ぜひご覧ください。
都留文科大学 http://www.tsuru.ac.jp/

ハーブの庭

前号では「香りのアトリエ『紗泡（さぼう）』」の杉本さんにお話をうかがい、わたしにとってハーブティーが非日常の特別なものから、毎日を少し幸せにするために日常に取り入れる身近な存在になった。今度はハーブそのものを自分の生活に取り入れてみたい。そこでじっさいにハーブを育ててみることにした。

小佐野めぐみ（国文学科4年）＝文・写真
﨑田史浩（社会学科4年）＝写真

ペパーミントの葉

自分で選び取ったハーブでわたしだけのハーブ園をつくってみたい、そう考えて4月26日に「河口湖ハーブ館」を訪れた。まずは育てやすいものから少しずつはじめてみようと思い、店員さんにお勧めのハーブを教えてもらった。育て方のコツをうかがいながら、どのハーブを育てようか吟味する。購入したのは初心者にも育てやすいというペパーミント。ポット苗で販売されているもので、すぐに葉を利用することができる。それから別名をポットマリーゴールドともいうカレンデュラと、ふわふわした葉が特徴のラムズイヤーというハーブの種も入手した。今回購入したものは花や葉に特徴があり、見ているのも楽しく、育てやすいものだ。

カレンデュラの種

さっそく大学に持ち帰り、編集室前のビオトープでプランターに植え付けた。カレンデュラの種はくるん、とまるまった特徴的な形をしていた。ハーブ館の店員さんのお話ではハーブは強い植物なので、ほとんど気にかけなくても、ちゃんと育ってくれるとのことだった。自分で種を買って植えるというのは今まで無かったので、順調に育つかどうか心配だが、成長がとても楽しみだ。

ハーブ一年生

都留市のカフェ「アルバム」のマスター、佐藤（さとう）ゆかりさんが、わたしと同じくハーブを今年から育てているらしい。仲間を見つけた気持ちになって、会ってお話を聞きたいと、5月24日に取材をお願いした。佐藤さんは昨年、バジルを育ててからハーブ作りに夢中になったという。忙しい時間にお邪魔してしまったのだが、快く迎えてくださり、お店の横にある庭でとれたミントのお茶を淹れてくれた。ミントの葉だけなのに緑茶のように鮮やかな黄緑色がきれいだ。すっきりした爽やかな香りで癒され、心まで明るく穏やかになる。

本当に少ししかないんですよ、とおっしゃっていたが、じっさい庭を見せていただくと、ハーブの女王といわれるローズマリーに、ペパーミントやラベンダー、バジルなど多種多様なハーブが育っていた。風が吹くとそれらさまざまなハーブの香りがふわっと漂ってく

る。まだ小さな苗でも、葉を触ってみると意外と強い香りがした。秋に自宅のベランダで種をまき、育った苗をお店の庭に植えつけたそうだ。ハーブを使うことで、お店に出す料理にスパイスを使わなくなるかもしれないとおっしゃっていた。それぞれのハーブの風味で十分味が出てくるからだ。ルッコラというハーブはピザなどにのせられるものだが、サラダでも食べられる。佐藤さんの庭で育てられていたルッコラの葉をそのまま味見させていただいた。噛んでいるうちに強い辛味がひろがってくる。確かにこれだとスパイスを足さなくとも十分だ。佐藤さんはハーブ一年生と言いながらもハーブに関して豊富な知識を持っていて、わたしは教えてもらうことばかりだ。「毎日庭を見るのが楽しみ」と、ハーブを見る優しい表情が印象的だった。ハーブは強い植物だから、きっと大丈夫、という佐藤さんの言葉にとても励まされ、成長を心配していた心が軽くなった。はじめてのことで不安ばかりのなか、経験者のアドバイスはとても心強い。

上：カフェ「アルバム」でハーブガーデンを見せていただく。一番手前が佐藤さん。何種類ものハーブが植えられている

下：佐藤さんが淹れてくれたミントのお茶。きれいな緑色で、すーっとした、爽やかな香りでリラックス

帰りぎわ、佐藤さんに苗を分けていただいた。シナモンバジル、スイートバジル、ブッシュバジルの三種類のバジルに、ネギのような細長いチャイブというハーブ。バジルソースの作り方や種の採り方も教えていただき、お茶に使う楽しみから新たに料理に使うこと、育てることの楽しさも見出すことができた。いただいた苗は、また編集室前のビオトープでプランターに植えて育てている。あせらず、楽しんで大切に育てていこう。

ハーブは薬草といわれるように、それぞれに違った効果を持っている。どこにでもある、場合によっては雑草にもなりうる植物なのに、疲れが取れたり、よく眠れたり、さまざまな効果がある不思議な植物だ。利用することで何らかの効果を得られる植物だが、ハーブガーデンとしてプランターや花壇で庭先に寄せ植えされているのを見るだけでも、なんだか穏やかな気持ちにさせてくれる。それが自分で育てているものであればなおさらだ。

編集室前ハーブガーデン　（6月3日）

ハーブを育てはじめて、わたしの毎日も変化しはじめた。ハーブを眺めている時間はいつもよりゆっくり流れている。その時間を過ごすだけで、今日も頑張ろう、明日も大丈夫、と明るい気持ちになれる。わたしにとってハーブは健康に良いだけじゃなく心まで元気にしてくれる。そのうちみんなでお茶会ができたらいいな、なんて想像してわくわくしながら、今日もわたしはハーブの庭を眺めている。

▲高尾町通りの山本書店：手前左（写真2）。
2011年12月撮影

▶店内に飾られた絵画や書（写真3）。
2011年12月撮影

掃除や正月準備の合間に市内の書店で求め、正月休みに読み始めるのが習わしだ。それは仕事や教養のためでなく、楽しみとして私が発売日を心待ちにする数少ない作品、あるいはほとんど唯一の作家といってよい（職業柄、ひんしゅくを買いそうだが）。もう20年来の習慣だが、一昨年（２０１０年）の暮れだけは買いそびれてしまった。気にしながらも昨年（２０１１年）、年末を控え次作が出そうな時期になり、もう店頭にはないのでamazonで探して（検索して）驚いた。１０００円近くしたその本が１００円以下で多数出品されている。結局私は上下巻を最安値の19円と26円で購入した。送料が２６０円。上下2冊より送料のほうがはるかに高い。さらに値段の下げ止まりをうかがいあちこちからの出品をチェックしていたので上巻を2冊カートにいれていたらしい。手元には2度に分けて上、上、下の3冊が届いた！　1年も経たずにこんなに安くなるのかと驚き、ものの値段や、価値の決まり方（？）に少し恐ろしさを感じた。これではまちの小売店は経営が苦しくなる一方なのかと思ったりもした。いわゆる神田などの古書店（現在ではネット上で蔵書が検索できとても便利になった）で、愛書家の手から手へと渡ってきた「書物」を求めるのとは異質な世界だ。

さて、山本書店の店先は、いつも先代の國雄（くにお）さんの手で季節の花々や木の枝葉などでディスプレイされ、通り（写真2）を歩く人びとの目を楽しませてくれた。店内には絵画や書（写真3）が飾られていた。息子さんの話では時間をかけて店を飾っていたという。そんな店で國雄さんはお得意さんと語らい、商いをしていた。こぼれるように愛想が良いというわけではないが、本を渡してくれるとき何かしらその本について、あるいは手配の苦労などについてコメントがついてきた。こちらも相当勉強しないと話についてゆけないことが多々だった。國雄さんは実家（静岡）が仏教寺院の関係者ということだが、時間があるとキリスト教会の墓地清掃などの奉仕をしていたという。また、國雄さんは、ご近所に住んでいた愛書家のK医師（図書館協議会※の委員を長くつとめ現在の都留市立図書館の基礎を築かれた一人）や、読書会や文化活動などでK医師のもとに集う人々とも親交が深く、その薫陶を受けていたときく。山本さんは、ただの物としての本を売る本屋さんではなかった。地域で人と人とのつながりを大切に、必要とする人びとに書物を手渡すことを自らの喜びとして商いに励まれ、長く学生の学びをささえ、まちの学術文化の発展に寄与していた。そんな書店や商いが次々にまちから消えてゆくことを残念に思う。

青池恵津子（都留市下谷在住）＝文・写真
北垣憲仁＝写真

※『地域交流センター通信』第21号「図書館の活動をささえる人びと＜展示リスト＞3」参照

山梨の味
～甘々娘編～

本学にはいろいろな都道府県から学生が集まってくる。
山梨出身の私は「ねぇ、山梨ってどんなところ？」と聞かれることが多くなった。
山梨ってどんなところだろう。
いざ答える段階になると、なんだか自信がなさそうな私がいることに気づく。
もっと胸を張って「こんなところだよ」と伝えられるようになりたい。
そこで私が知らない山梨を、まずは食を通して一つずつ発見していこうと決めた。

深澤加奈（国文学科２年）＝文・写真

甘々娘に囲まれ笑顔の堀口さんご夫婦

スイートコーンの茂みの向こう側、ここだよ、と居場所を示してくださった。私が今回見つけたのはスイートコーンの「甘々娘」。西八代郡市川三郷町の旧三珠地区で作られている特産品だ。名前は映画「銀座カンカン娘」にちなんでつけられたそう。

5月1日、空は薄曇り。そんな空の下でも甘々娘たちは生きいきと青い葉を広げていた。「農協のやつも呼んでるから」と紹介されたのは一瀬大輔さん（36）。畑の脇に停めてあった軽トラックの荷台に堀口さんは腰掛け、お話を聞かせてくださった。

堀口さんが甘々娘を育て始めたきっかけは意外なものだった。家庭栽培用に甘々娘の種を貰おうと農協を訪ねると「ぜひ、本格的に育てて頂けませんか」とお願いされたのだそうだ。

甘々娘は〝とうもろこし〟ではなく〝スイートコーン〟の一種。「とうもろこしってのは完熟してから粉にする、穀物なんだよ。だから実は堅い。それに対してスイートコーンは生食用だ。違いが分かるか」と堀口さん。「甘々娘のようなのを、未成熟とうもろこしっていうんだ」と一瀬さんが付け加える。「ポップコーンのもとになるのは完熟したほうの〝とうもろこし〟の粒ってことですか」とたずねると、そうそう、と二人は頷く。

1月上旬には畑の準備に取り掛かり、種を蒔き始めるのは2月上旬。最初に育てる甘々娘の畑にはビニール製の二重のトンネルを張り、そのなかに「湯たんぽ」と言われる筒を用意する。湯たんぽには水を充てんし、それによりトンネル内の温度変化を少なくするそうだ。水はトンネル一本につき約1t半も使う。「山梨は寒冷地だからなぁ、寒さに弱い

アナグマ　2012 年 3 月 30 日

ここは「フン場」になっているため、アナグマのほかにタヌキもよく写ります。

ネコ　2012 年 3 月 28 日

人里から離れた山中でもネコが写りました。かなり山奥まで入っていくようです。

ニホンジカ　2012 年 4 月 3 日

このニホンジカの角は細くて短いため、若い個体のようです。

イノシシ　2012 年 3 月 31 日

イノシシは鼻を地面につけて食物を探すため、鼻先に土がついています。

センサーカメラが写した動物たち

ヤマドリ　2012 年 4 月 5 日

ヤマドリのオスが 2 羽で行動しているようです。都留市内では、あまり見られない鳥です。

＊都留文科大学の裏山に赤外線のセンサーカメラを設置して、動物の調査をしています。この写真は、2012 年 3 ～ 4 月に撮影された動物たちです。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真

第17回

フィールド・ミュージアムのたのしみ

H・D・ソローが『ウォールデン　森の生活』（今泉吉晴訳、小学館）で示唆した散歩のほんとうの意味とは何か。散歩をとおして見えてくるものとは。私たちは歩くことで、変貌する自然やまちの今を記録し、フィールド・ミュージアムのたのしみを報告していきます。今回は、前回の「山本書店」の続編です。

跡地（写真1）。2012年3月16日撮影

谷の町・史（ふみ）の里
都留市高尾町通り　山本書店②

山本書店のことを書いた前号（72号）が発行された直後に、主（あるじ）の去った山本書店は解体され更地（写真1）になった。そして「『フィールド・ノート』を読みましたよ」と何人かの方々から編集部とフェイスブックにメッセージが届けられた。それらは山本書店の思い出を大切にされ、山本さんのような商売が地域で成り立たないことを残念に思う内容だった。今回はそんな人びとの記憶も記録しておきたい。

＜フェイスブックから（抜）＞

■市内Aさん――

『フィールド・ノート』で（山本書店の）記憶を共有できてうれしいです。

■市内新聞店でタウン誌を編集するKさん――

フィールド・ミュージアムに山本書店の看板が残ってよかったです。高校生の頃、早朝走っていると、川棚（かわだな）の橋の坂で山本書店の親父さんの散歩（いつも友だちと連れ立って歩いていた）によく行き会いました。たおやかな奥さんの店番、一徹さを継いだ息子さんのバイク姿…心に残っています。（中略）amazonより早い山本書店！　夕方頼んだ本が翌日の昼に手に入ることもあった。その小気味よさ！　そして受け取る時のあたたかさ…「娘さんもおおきくなったでしょ？」「はい」というようにいつも話をして、「あらやだ、おつり渡したっけ…」という感じ。店は土間で、山本書店の家族は座敷で格子のカウンター越しに正座で対応。息子さんは、炬燵で仕分けをしながら時々音楽の話をしたりした。客と店との目線のつりあい…〝本〟を大切に橋渡ししてくれた。

■市内自営業Iさん――

山本は旧友なので…悔しいです。ああいう店もやっていけるような街であって欲しいなぁ…。

■市内Aさん――

個人商店にはきびしい社会になってしまいましたね。本だけでなく、買物も〝便利〟さや手軽さと引き換えにひとのつながりや、情緒も薄くなっています。私もコンビニやamazonを使うのですが、それでもなるべく、スーパーや量販店でなく地元の小売店や専門店で買うことにしています。

私には毎年決まって暮れにS社から出されるアメリカのある女流作家のサスペンス（シリーズ）を買う習慣がある。文庫本だが1冊1000円ほど、上下巻で2000円だ。大

私たちの日常は、
音であふれている

次回予告

音

2012年8月発行予定

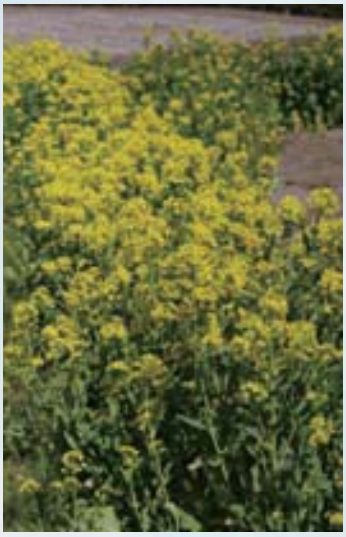
ツノハシバミの花
2012 年 4 月 5 日　都留市十日市場
細長く垂れ下がっているのが雄花で、上の赤いのが雌花です。長い雄花が風にゆられて花粉が飛びます。

プラムの花
2012 年 4 月 16 日　都留市十日市場
中屋敷の果樹園にて、プラムの花が咲いていました。今年は果実を収穫したいと思います。

ズミの花
2012 年 5 月 11 日　都留市朝日馬場
ズミはリンゴ科の植物です。ズミを改良して、リンゴを作ったといいます。

ミツバウツギの花
2012 年 5 月 11 日　都留市与縄
茎に葉が 3 枚ついていることからこの名前がつきました。小さな花の集まりに素朴な可愛らしさを感じます。

クサノオウの花
2012 年 5 月 17 日　都留市川茂
背丈の高い草地でよく目にします。茎と葉を切ると出る黄色い汁は有毒です。



水掛菜の花
2012 年 4 月 9 日　都留市十日市場
都留の気候を活かし、昔から作られてきた水掛菜。この花は、種を収穫するために残してあるものです。

フィールド暦

なんとなく、わくわくする春の季節——
木を見上げ、水のなかをのぞき、地に目を凝らす……。
いつもより周囲を気にかけると、
ちょっとした出会いと発見があるのです。

コオイムシ
2012 年 5 月 24 日　都留市十日市場
水のなかで発見。その名の通り卵を背負っているのはオスです。メスは卵を産みつけるとどこかへ行ってしまいます。子育てはオスの役目です。

オドリコソウの花
2012 年 5 月 24 日 都留市十日市場
花が大きな葉にかくれています。よく見ないと見落としてしまいそうです。

チュウサギ
2012 年 5 月 17 日　都留市大原
水を張った水田にチュウサギがいました。大きさが中型であるためチュウサギといいます。

FIELD NOTE
no. 73 Jun.

発行人
北垣憲仁〔42-43〕
統括編集者
西教生〔34-35,42-45〕
編集長
香西恵〔22-23,30-31〕
牛丸景太〔1,6-9,34-35,48〕
前澤志依〔12-15,32-37〕
編集
狩野慶
大澤かおり〔10-11,34-35〕
小佐野めぐみ〔38-39〕
﨑田史浩〔4-5,20-21,24-25〕
反保智栄
平井のぞ実〔26-27〕
藤森美紀〔4-9,24-25,34-35,46-47〕
持田睦乃〔2-3,16-19,34-35〕
鈴木陽花〔44-45〕
椛澤碧〔44-45〕
深澤加奈〔40-41〕
水野孝英〔28-29〕
大神田かれん〔46-47〕
海賀沙也佳〔36-37〕
三枝弥生〔46-47〕
別符沙都樹〔36-37〕
細矢芽〔36-37〕
細矢萌〔46-47〕
ロゴデザイン
工藤真純
10 周年ロゴデザイン
石川あすか

〔 〕は編集担当ページ

FIELD･NOTE（フィールド・ノート）
発行日：2012 年 6 月 26 日
発行部数：400 部
発行・編集：
〒402-8555
山梨県都留市田原 3-8-1
都留文科大学
コミュニケーションホール地下 1 階
地域交流研究センター
フィールド・ミュージアム部門
『フィールド・ノート』編集部
E-mail：field-1@tsuru.ac.jp

編集後記

子どもの頃にした遊び

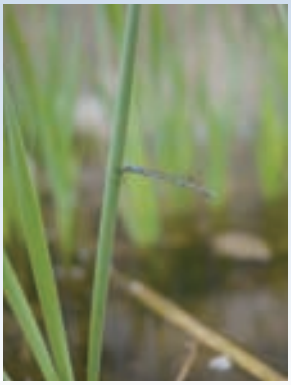
わたしは道なき空間に足をふみ入れ、未知の場を探検することに夢中だった。家と家や木々のあいだに入りこみ、川原の草むらをかき分けて、狭い隙間にもぐり込む。そうして、新しい世界との遭遇を求め、そこで何か特別なものに出会うことを期待していた。行きついた新しい場所には、初めての景色が広がり、日常とは少し離れた特別な感覚を覚えた。その発見が嬉しかった。小さな頃は未知の空間や状況への好奇心でいっぱいで、それを満たそうと小さな旅に出ていた。　（椛澤碧）

たも網とモリを持ってキャンプに行くのが、我が家の夏の恒例行事でした。狙いは小さい魚。兄がモリを使ってカニを突いている横でそっと息をひそめ、自然と同化するぐらいの気持ちでつねに水面を見つめる。水中の魚の動きに集中していくにつれ世界が小さくなる。この時間が大好きでした。どんな運動をやってもダメな私が唯一得意としていたことです。真剣勝負はほとんどが魚の勝利でしたが。大人になるにつれ忙しくなってしまい、しばらくたも網を持ってはいません。今年は一回だけでも触れたいな、と思っています。　（細矢芽）

げんきに外を走る、それが私の一番の遊びでした。鬼ごっこから始まり、色鬼にこおり鬼に手つなぎ鬼。とにかく校庭の隅から隅まで走り回っていました。ですが走るだけではありません。近所にある神社に集まり、ベーゴマ勝負もしていました。ベーゴマを持っている子どもはあまりいなかったので、持っていると少し自慢ができるのです。息子とキャッチボールをするのが夢だった父とたまにキャッチボールするのも、密かに楽しみでした。　（大神田かれん）

©2012『フィールド・ノート』編集部　乱丁・落丁の場合はお取り替え致します。編集部までお知らせください。

FIELD·NOTE no. 73



発行日 2012年6月26日（年4回発行）
発行所 〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大学 コミュニケーションホール地下1階
地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門『フィールド・ノート』編集部

野生を育む
Grow Wild
都留文科大学
フィールド・ミュージアム
Decent Wildlife and Our Community